青いチビの使い魔

だしィー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青いチビの使い魔

【Ｎコード】
Ｎ１８１５Ｗ

【作者名】
だしィー

【あらすじ】
こんにちは、音深之珠鬼奇（おとみのたまきき）です。
転生者です。そして妖怪です。なんか、召喚されたらしいのでがんばります。

主人公設定（前書き）

適当なので気をつけて

主人公設定

音深之珠　鬼奇（おとみのたま　きき）

年齢２０　　ぬらりひょんと鬼のハーフ

外見　ネギま！のナギ・スプリングフィールド。髪の色は黒

能力
ぬらりひょんの孫から、ぬらりひょんの畏（おそれ）
青の祓魔師から、魔王（サタン）の炎
シャーマンキングの陰陽術

性格
一応は真面目ただ相当な面倒くさがりで、好きな事には労力は惜しまないが
関心がない物にはとことんルーズになる。対話・会話が少々苦手。

概要
大学のサークル仲間と山に虫取りに行ったときにハブに噛まれて死亡
死後なんやかんやで超常的な何かから能力貰って転生する。
転生先は夜桜四重奏の世界。原作介入をめざして色々努力していたが
原作開始の３０年前だった事に気づいた時、一気にダメ人間になった。
バイト帰り目の前に鏡のような物が現れ、
避けられずスクーターで突っ込んだら異世界に召喚されてた。

主人公設定（後書き）

気分転換で書くので更新はとても遅くなります。さらに内容もテキトーに
なりますのでご了承を。

召喚とかされたらしい（前書き）

すごく更新が遅くなると思います。

召喚とかされたらしい

タバサＳｉｄｅ

ブロロロロロロ！！
そんな音と共にソレは現れた。私はとっさに身をひるがえし突っ込んでくる赤い色をしたソレをかわすとすぐさまソレに対して杖を構え警戒する。一体何が出てきたのだろう？先ほど出てきたソレをよく見てみると。

「な、なんだ！」

しゃべった。いや、違うあの変な音を出している物の上に乗っている見た事の無い妙な服を着た人が声を出したのだろう。と、言う事はまさか私は人間を召喚してしまったのだろうか？

「おいおい、何だコイツ。」「くくく、おいコイツマント付けてないぞ。」「と言うことは平民か？」「あはははは、？あの？ミス・タバサが平民を召喚したぞ！」「マジかよｗｗｗｗｗ」

「あ〝ぁ！？なんだお前等？」

周りのクラスメート達が私と召喚した青年を馬鹿にするような事言うがそんな事はどうでもいい。とりあえず私は召喚した青年に近づき彼をよく見る。

「？、なんだよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

私が何も反応を返さないと彼も私と同じように無言でこちらを見てくる。

「あー、ゴホンッ。ミス・タバサ儀式の続きをよろしいかな。」

コクッ

動かなくなった私達に痺れを切らしたミスタ・コルベールが儀式の続きを促してきた。確かにこのまま見合っててもしかたがない。

「・・・降りて。」

「へぁ？」

「ソレから降りて。」

「？・・・コレでいいか？」

彼を乗っていた物から降ろしたが？アレ？をするのに彼の頭に届かない。

「しゃがんで。」

「ん～やだ」

鬼奇Ｓｉｄｅ

ん～、あー、やっと思い出した。ゼロ魔だねここ。なんつーか、微妙だな～嬉しいっちゃ嬉しいけど、めんどくさい世界でもあるからなぁ、特にピンクと青は厄介事の塊だし。そして俺はその青い方に引き当てられたっと、つい反射で断ったけど俺タバサ好きだから本当は全然ＯＫなんだよなぁ。さて、どうゆう言い訳しようかな？

「・・・しゃがんで」

もう一回いってきたよ。よし、ここはかっこつけて・・・・・やめた、なんかめんどい、ゆうこと聞いて流れに任せよう。

「はぁ、こうか？」

俺は青チビことタバサの言うとうりにしゃがんだ。まぁ何されるか知ってるけどね。タバサはしゃがんだ俺に近づいてそして、

「・・・ん。」

「・・・・」

唇を重ね合わせた。余談だけど俺、ファーストキスじゃないから。俺がいた世界でもう済ましてるし、あの頃はがんばってたなぁ～。って肩熱っ！！！

「痛っ！！」

「大丈夫、ルーンが・・・」

ガシッ

「お前も痛みを味わえ！」

俺は何か喋り始めたタバサの頭を鷲掴みし締め上げる。

「・・・！！・・・！・・・」

とりあえず痛みが引くまで・・・

「・・・エア・・・・ハンマー」

ゴォォ！！

「うげぇ！！」

締め付けて様と思ったら吹っ飛ばされた。くぅぅ、腹痛ぇ。

タバサＳｉｄｅ

私は『コントラクト・サーヴァント』を彼と行い、肩にルーンが刻まれてる事を確認し痛がっている彼にその事を教えようとしたらいきなり私の頭を片手で掴みそのままものすごい力で締め上げてきた。私はとっさに痛みの中え『エアハンマー』を唱え彼にぶつけて吹き飛ばした。それなりに力を込めたので意識は無いだろうと思っていたが

「何しやがるチビ。」

すぐに起き上がって文句を言ってきた。まさか近距離でしかもそれなりに力を込めたエアハンマーを食らって起き上がるとは思わなかった。

「おーい、聞いてるか？」

彼はまるで何事も無かったように私に声を掛けてくる。もしかしたら私はとんでもないものを召喚したのかもしれない。それを確かめたく私は杖を彼に向けて構えをとる。しかし、

「ミス・タバサ、お取り込み中申し訳ないが今は授業中だそうゆうことは後でお願いできるだろうか。」

ミスタ・コルベールに止められた、周りも私達に注目しており私は構えを解いて彼を連れてこの場を離れる。そういえば彼が乗っていた赤い物は何なのだろうか？今は変な音もせず彼が移動させている。後で聞いてみよう。

「・・・・・どこ行くんだ？チビ助」

「タバサ」

「へぇ？」

「私の名前」

「タバサね、俺は音深之珠鬼奇（おとみのたまききき）、鬼奇と呼んでくれればいい。」

「わかった。」

オトミノタマキキ、とても変な名前だ、それにやはり彼の着ている服もとても珍しいものだ私は行った事はないが闇市で東方からの服に似たようなものがあるのを聞いた事がある。ということは彼は東方の人間となる。もしかしたら彼は私の希望となるかもしれない。

ジンSide

クソッ！どういうことだ！なぜ、タバサちゃんの使い魔がシルフィードじゃないんだ！！これじゃあ俺のハーレムを作れない。何とかしてあの邪魔者をどうにかしないとって言っても俺には神様から貰ったチート能力があるからあんな顔だけのヤツどうにでもできるし、もしあいつが何かしらの能力持ってたとしても俺に勝てるわけ無いしな、ウヒヒヒ・・・。

召喚とかされたらしい（後書き）

とりあえず主人公は地味に無双キャラです。あとこれは気分転換で書くので矛盾やテキトーな描写がたくさん出てきます。それでも読んでくれれば幸いです

話し合い的な事をした（前書き）

テキトー過ぎる、そしてグダグダ無駄に長い

話し合い的な事をした

タバサＳｉｄｅ

「あなたは何者？」

「妖怪」

私は彼を広場から離れた人目の付かない所まで連れてきて何者かを聞いたらヨウカイと言ってきた。ヨウカイとは一体なんだろうか？東方でのなにかしらの役職だろうか。

「それはどうゆう意味？」

「ん～、そうだな。簡単に言えば、種族か？」

種族・・・・つまり亜人のようなものだろうか。しかし彼は人間にしか見えない。

「あなたは本当に亜人なの？」

「亜人・・・まぁ人間ではないからそれであってるかな。」

彼は外見は私達と同じだけど亜人であるらしい。そういえばヨウカイとはどんな亜人なのだろう。

「ヨウカイとは一体どんな亜人なの？」

「ああ、ソレは違う。俺が住んでた場所では亜人の事を妖怪と呼ぶ

んだ。」

東方ではコチラと亜人の呼称が違うらしい、たしかに地域が違うだけで物の名が変わるなんてよくあるのだからコチラと東方で違うのはあたりまえか。

「まぁ、お前の言いたい事は理解したから、俺はぬらりひょんって言う妖怪と鬼と言われる妖怪のハーフだ、っても分かんないよな。」

ヌラリヒョンとオニ。一体どのような亜人なのだろう、しかし私は彼が亜人どうしのハーフと言うのが気になる。

「貴方の住んでいたところは沢山の種類の亜人が住んでいるの？」

「そうだな、俺が住んでた町は人間と色々な妖怪が一緒に住んでるんだ。俺のようなハーフなんて珍しくないぞ。」

私は驚いた、私達の住んでいるここでは、亜人と共生なんて基本考えないからだ。しかも1つの種類だけの亜人とならまだしも複数種類の亜人との共生と聞いたらなお更だ。

「貴方は「なぁ、」・・・なに？」

「次は俺が質問していいか？」

そういえばさっきから私ばかり質問していて彼はソレに答えるばかりだ。

「わかった。」

「それじゃ、ここは何処だ？」

鬼奇Ｓｉｄｅ

俺はとりあえず念のために此処の名を聞いた。

「此処はトリステイン魔法学院。」

「国の名前は？」

「？・・・トリステイン。」

「ふーん」

俺は此処の名前を聞いた後、空を見上げて月を見る。なるはど月は二つあるな。さて、使い魔のルーンについて確認しておくか。とりあえず警戒されないように言葉を選んで、

「俺の肩に付いた物はなんだ？」

「使い魔のルーン」

「それはなんだ？」

俺はタバサに対して上手い具合に質問して行き一番聞きたかった事を聞く。

「へぇ～、じゃあ俺の見てるものが見えたり、聞いた事が聞こえるのか？」

「意識すれば。」

はぁ～、厄介だな。

「消す事は出来ないのか？」

「無理、それが消えるのは私か貴方のどっちかが死んだ時。」

とりあえず予想通りだな。・・・・・力を使って消すなり制限を付けるなり出来るか後で試してみよう。

それじゃあ聞きたい事は聞いたし、ちょっと試してみるか。

「んじゃ最後の質問、お前の本名は？」

「！？っ・・・何故？」

ふむ、動揺してる・・・・のか？よく分からんがまぁいいや。

「そうゆうの俺は分かるんだよ。」

正確には俺の能力でタバサの心を少々覗いたんだけど、そういえばこの子の本名シャルロットだったな。

「で、名前は？」

「・・・・・それは言えない。」

「へぇ、俺はお前の使い魔なんだろ？どうして。」

「私は貴方の事まだ信用してない。」

あらあら厳しいねぇ、よくＳＳだとすぐに色々話し出すけど現実はそう簡単じゃないってことか。

「ふーん、なら信用してもらえるように俺も少し秘密を明かそうかな？」

「？・・・秘密って」

「まぁたいした事じゃないが、俺はある特別な力を使ってルーンを消せるってことぐらいだしな。」

まだ試してないけど大丈夫だろ。

「他には、人の心を限定的だか覗けたり後はなんか色々できたりするぞ、シャルロットちゃん。」

シャーマンキングの能力って便利だよな。

「！？っ・・・私の心を覗いたの？」

「信用できないって言うのは俺も一緒でな。こんな見た事も聞いた事も無い場所に誘拐まがいの方法で連れてこられたらなお更だ。」

「・・・・・他には何を見たの。」

「そうだな、お前がガリアって国の元お姫様って事、国の暗部組織

で働いている事ぐらいだ。」

「・・・そう。」

原作知識で他にも色々知ってるが言う必要は無いな。

タバサＳｉｄｅ

驚いたどころの話しでは無かった。彼が東方の亜人だから私が知らない知識や先住魔法を使う可能性を考えていなかった訳ではないが、なんの詠唱も無く特別な動作も無しに人の心を覗く魔法を使っていたのもそうだし、本来消す事の出来ない使い魔のルーンを消す事が出来る事いい私は本当にとんでもない物を召喚したみたいだ。

「貴方は、心を蝕む病をどうにかできるの？」

私は無意識のうちにそう話し出していた。

「あー、そうだな。ソレが自然的な物じゃない、つまりは他者による術・・・こっちでは魔法か、であれば症状を見てないから絶対とは言えないが治せるぞ。」

「！っ・・・・治・・・せる・・の？」

自分の声が震えてるのが分かる。長年、母の心を取り戻すために様々な文献や本を読み、珍しい薬や万能薬が有ると聞けば手に入れては母に飲ませても無理だった病を彼は絶対ではないけど治せると言った。

「ほ、本当に・・・本当に治せるの！」

私は知らず知らずのうちに声が大きくなっていた。彼は私の態度に驚いていたが苦笑いで

「まぁ、試してみればいい、治せなかったとしても症状を軽くする事は出来るはずだ。」

そう言ってくれた。私はその言葉を聞いた瞬間、座り込んでしまった。やっと、やっと母を救える、長い悪夢から起こして上げられる。そう思ったら足から力が抜けてしまい、挙句には

「うっ・・・・ひぐっ・・・・うううっ・・」

涙が出てきてしまった。情けない、もう泣かないと誓ったはずなのに止めようと思っても全然止まらない。

「い〝っ！ちょ、えっ、泣くなよ！あーえっと、ええええっ、」

彼が物凄く動揺している。私は今のうちに泣くのを何とか止めて、深呼吸をして心を落ち着かせる。

「・・・・・もう、・・・・大丈夫。」

「そ、そうか。」

「お願い。私の母を・・・・助けて。」

私は彼にお母様を助けてくれるよう頼んだ。

「ん～そうだな、俺の言う条件を飲んでくれたらいいぞ。」

「何でも聞く。」

お母様が助かるのであれば私は何でもしよう。たとえそれが体を差し出す事でも。

「おう、そうか。それじゃあ・・・・」

ルイズSide

ドッゴォォォォォォォン！！！

また、失敗した。なんで！なんで！なんで！！！

「おいーwwwまた失敗か？」「ハハハハハ、見りゃわかるだろ」「ゼロ相手には使い魔の方も嫌がってるんじゃないか」「そうかもな！」「もう、諦めて留年しちゃえよ」

周りからたくさんの嘲りの声がする、うるさいうるさいうるさい！！私は、私は！

「その・・・ミス・ヴァリエール？今日はもうやめに止めにしませんか？明日また気分を変えれば成功するかもしれませんし。」

コルベール先生がもう終わりにしようと言って来た。明日また「サモン・サーヴァント」をさせてもらえるのは先生の優しさだろう、でも！

「あ、あと一回！あと一回だけやらしてください、お願いします！」

そんなの嫌だ！周りに馬鹿にされたまま終わるだなんて・・・惨め過ぎる。

「それじゃあ、最後に一回だけですよ。」

「はい」

私はもう一度呪文を唱える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従い・・・・・私の運命を変えてくれる！・・・強く、最高の使い魔を召喚せよ！」

お願い！始祖ブリミルよ、私に、何でもいいから召喚させて！

ドォッゴォォォォォォォォォン！！！！！！

話し合い的な事をした（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、北花壇騎士団であるタバサは大人な知識はあります。
その2、シャーマンキングの能力はご都合展開のための能力です。
その3、シルフィードは乗り物要員として出します。

テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり（前書き）

遅くなりました。今回はルイズとチート転生者のジンの話し。主人公は出てこないよ。

テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり

リオンＳｉｄｅ

「どうやら僕の番のようだな。」

「ジューダス！？」

カイルが悲痛な声で僕の事を呼ぶ。

「お前達との旅、悪くは無かった。」

僕は仲間達に最後の挨拶をする。

「ジューダスは此処から消えたらどうなっちゃうの！？」

「わからない、次空間の彼方をさまようか、リオン・マグナスとして消滅するか・・・でも僕はこの運命に感謝している。お前達に出会えた・・・一度死んだ男が手にするには大きすぎる幸せだ。ありがとう、カイル、ロニ・・・さらばだ」

少しづつ僕の体が光となり、そして僕はこの世界より消えた。

（我・・・・・ヴァリ・・・ンタゴン・・・・・・・・）

なんだ？・・・この声は？・・・僕は消えたはず。僕は戸惑いを覚えながら自分の姿を確認をし周りを見渡す。そこは蒼くまるで海の中のような所だった。

「ここは、次空間の彼方と言うやつか。どうやら僕は神にとことん嫌われたらしいな。」

自嘲気味に僕は呟く。神等ろくでもない者だと分かっているだろうに。

（・・・私の運命を・・・・・）

また？一体何処から聞こえるんだ？僕はこの蒼い空間を再度見渡してみる、しかし周りは何処までも続く何も無い空間だけ。

「幻聴か？確かにこんな所に居続ければ人間などすぐに精神をやられるな。」

僕はそう呟く。僕自身も何時まで正気を保っていられるか、僕はその時が来るまで身を任せて空間に漂おうと思い静かに目を瞑った瞬間、

（・・・・を召喚せよ！）

また声が聞こたが、しかしその声が今までのとは違い空間全体に広がるように響き渡る。僕は状況を見ようと目を開けたら僕の前に光る鏡の様な物が浮かんでおり僕を引き寄せていく。踏み止まる事もどこかに掴まる事も出来ず僕は鏡に飲み込まれた。

ドォッゴォォォォォォォン！！！！！

鏡に飲み込まれた僕はとてつもない爆音に驚きすぐさま腰の剣を抜き戦闘態勢になる。周りは土煙でまったく見えず僕は感覚を研ぎ澄ませる。

「あーはははははは、やっぱりゼロはゼロなんだよ。」

声が聞こえてきた。感じからして１０代の人間の声だ、

「まったく、無駄な事しやがって。」「ホントホント、すぐに諦めちゃえばいいのに。」

それも周囲に十数人ほど、気配の感じから戦闘をする感じではない事が分かる。

「ミス・ヴァリエール、残念ですが・・・・・！！？」

「おい！何か居るぞ！」「うそ、ゼロが魔法に成功した！？」

土煙が晴れていく、僕がそこで見たものは・・・・

ルイズＳｉｄｅ

「あんた、誰？」

土煙が晴れた後、そこに両手に剣を持った男の人が居た。

「・・・・・・・・・・・・・」

「むっ・・・ちょっと！私の話聞いてるの！？」

男は何も言わないまま周りを見渡している。この私が話しかけてるのに無視するなんていい度胸じゃない！大体、変な仮面なんかしち

ゃって何なのかしら！服は全身真っ黒な妙な刺繍の入った服に趣味の悪いマン・・・・・ト・・・・・・って、え？・・・・マント？あれっ？え！

「おい、あいつマント着けてるぞ。」「つまり貴族（メイジ）ってことか？」「でもあいつ剣持ってるぞ？」「剣型の杖じゃないか？」「って事は、ゼロは貴族を召喚したのか？」「それってヤバいんじゃないか？」

「み、皆さん落ち着いてください！」

周りが男の事で騒ぎ出したのを先生がたしなめているが私はそれど比ではない。男が別の国の貴族、しかももし地位の高い家柄の人物だったら国際問題になりかねない。ど、どうしよぉ・・・。

「おい貴様等、此処はどこだ。」

男が話しかけてきた。

「え、えっと、その、こ、此処は・・・」

「此処はトリステイン王国のトリステイン魔法学院です。」

混乱していて上手く答えられない私の代わりに先生が答えてくれた。さらに・・・

「いきなりこのような事になり本当申し訳ございません。不躾な質問で申し訳ありませんが貴方は何処の貴族でいらっしゃいますか？」

私の聞きたい事も聞いてくれた。男は先生の答えに対し怪訝な表情

をし、少し何かを思案したかと思うと、剣をしまい先生に質問をしてきた。

「お前、セインガルド王国、ファンダリア王国。この二つの国の名をしっているか？」

「す、すみません。そのような国の名前は聞いた事が無く・・・」

「なら、レンズと言われる物質はわかるか？」

「いえ、それも・・・まったく。」

男は先生に聞いた事の無い国の名や物の名を聞いた後また黙ってしまった。

「あの、貴方はさきほどの国の貴族なのですか？」

「・・・いや、僕は貴族ではない。」

なっ！貴族でもない無いのにマントを着けてるなんて、失礼なやつ！

「ちょっと貴方！！貴族でもないのにマントを着けてるなんでどう言うつもり！」

私は男対して文句を言う。

「ん？なんだお前は。」

「なっ！？なんだじゃないわよ！私は貴方を召喚したご主人様なの、わかる？」

「・・・・・・なんだ、ただのバカか。」

「！！！？？！！」

「おい、聞いたか？」「ああ、アイツ貴族じゃないんだってな。」「じゃあ、武器を持ってるし傭兵の平民か」「なんだ脅かしやがって。」「所詮ゼロはゼロって事か。」「しかも召喚した平民にバカにさせれてるぞ。」「みっともない。」

こいつ、私に向かってバカって言った！このヴァリエールの三女である私に対してなんて無礼なヤツなのかしら！！きっとどこか遠い辺境の田舎者に違いないわね。周りの奴等もまた騒ぎ始めてうるさいのよ！！

「ふむ、ではミス・ヴァリエール。彼と儀式の続きを。」

「えっ！？」

まさか、こんな無礼な男を使い魔にしなければいけないのだろうか？

「待ってください。これはきっと何かの間違えです。もう一度やり直させてください。」

「ミス・ヴァリエール。これは神聖な使い魔の召喚儀式だ、やり直す事はできない。さぁ続きを。」

そ、そんなぁ～。ううっ、こんな無礼で変な仮面を被ってるヤツを使い魔にしなきゃならないなんて、最悪だわ。

「あんた、平民が貴族にこんなことされるなんて本当は無いんだから一生感謝しなさいよね。」

「お前は、なにバカな事をいってるんだ?」

「くっ!また、バカって・・・・まぁいいわ。五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

私は呪文を唱えて男のにキスをしようと・・・・・・

「ちょっと、その変な仮面取りなさいよ。」

「なぜ取らなくてはならない。それに使い魔とはなんだ。」

「ああもう!私の言う事を聞いてればいいのよ。」

いちいち口答えしてくる男に私は飛び付き無理矢理仮面を取る。

「くっ、貴様なにをする!」

「うっさいわね!あんたが言う事・・・聞か・・ない・・から・・・・」

「うそ・・」「カッコイイ〜?」「超美形?」「?????????」「私の王子様??」

こんな変な仮面を被っているから素顔も変だと思っていたら・・・・すごく・・・・カッコイイ////////

たぶん歳は私達と同じぐらい、切れ長の目にサラサラな髪、そして美形。わっわっふぇ!

「おい、それを返せ。」

「・・・・えっ！あっ、いや・・・」

どうしよう、コレ返したらキスができ・・・キ、キス！え！この人とキス／／／／／。お、落ち着きなさいルイズ。コレは神聖な儀式であってやましい事はなにもないのよ！そ、そうよ！ど、堂々としてればいいのよ。

「あああああんた！こ、これを返して、その・・・欲しかったら！そこに屈みなしゃい！！！」

／／／／／／／／／／／／／！！か、噛んだーーーー！！あああーー！何やってんのよ私！恥ずかしいーー。ハッ！ダ、ダメよルイズ、こんな事で取り乱しちゃ。私はなんとか冷静を装いながら彼の顔を見る。

「ふっ」

鼻で笑われたぁぁぁ、うぐぐ、落ち着きなさい私、私はルイズなのよ、あのヴァリエール家の三女なのよ、ガンバレ私。

「わ、笑うんじゃない！とにかく屈んで！」

「はぁ、これでいいか。」

・・・・・・・・はぁ～カッコイイー。って見とれてる場合じゃない！私は意を決して彼に近づき・・・

「んっ！」

「！？」

キスをする。

「！？・・・貴様何をする！」

「／／／／／／／／／つ、使い魔の・・・契約をしただけ・・・よ。」

「使い魔の契約だと？・・・くっ！な、なんだ！」

「あっ！だ、大丈夫、使い魔のルーンが刻まれてるだけだから。」

「つ、使い魔の、ルーンだと？・・・うっ、意識が・・・」

「えっ！ちょっと！」

彼はルーンが刻まれ始めるとフラフラと倒れて意識を失ってしまった。なんで！？

ジンＳｉｄｅ

な・ぜ・だーーーー！！！！！おいおいおいおいおいおい！！！！なんでリオン・マグナスが召喚されんだよ！才人じゃないんだよ！タバサちゃんには変なイケメン、ルイズにはリオン、一体全体どー

なってるんだ！クソッ、これじゃあ俺の無双でハーレムな計画がぁぁぁぁ！！

「ミスタ・アルベルト！聞いているのかね？君が最後だ。さぁサモン・サーヴァントを」

「あ！はい、すいませんミスタ・コルベール。」

「君が呆けているなんてめずらしいですな。」

「あはははは、僕も少しは緊張しますよ。」

うるせーなハゲ、こちとらパニクってたいへんなのに！が、愚痴ってても仕方ない。俺も使い魔を召喚してこれからの事を考えなければ。

「ついに？あの？アルベルトがサモン・サーヴァントを」「たった１０歳でスクウェアになったて言う」

「しかも全ての属性が使えるんだろ。」「いったいなにが召喚されるんだ。」

さて、俺にはなにが来るかねぇ。まぁチート転生した俺なんだから使い魔もそれ相応の物が来て当たり前だよな。タバサちゃんとルイズの件もあるし俺も異世界の魔獣とかくるかもな。ふふふふ。

「・・・我が名はジン・アークレイン・ロ・ランタ・グシセイア・キ・アルベルト、五つの力を司るペンタゴン、我の運命に従い、使い魔を召喚せよ！」

ブゥン！

目の前に召喚の門が現れる。はてさてなにが・・・・

「・・・・・・・・よ・・・・・・・わ・・・・・・・てい・・・・」

ん？なん・・・だ、門から・・・声が・・・？

「・・・・・れる。こ・・・・・・・・・なのね！！」

・・・・・き、聞こえてる！！確実に人の声！しかも女性だと！えええええええええ！！俺もか！？俺もなのか！？い、一体誰が来るんだ！？俺は門から少し離れて様子を見る。すると

「おお！！神よ！これが薄幸で宇宙一の美少女である私の運命だと言うの！！なんて、なんてすばぁあぶぅ！！」

なんかヤバイ事を言いながら女の人が出てきてすっころんだ。えーと、外見は黒髪のロングヘアーで顔はチラっと見たけど結構可愛い。身長は１６０あるか？まぁそん位、服装は・・・・なんて言ったらいいのだろう？白をベースに青と黒の色が入ったコート（？）でいいのか？のんな感じの物を着ている。

「また？」「今年は一体どうなってるんだ？」「アレベルトまで」

さすがに3人も人間が召喚されれば周りのバカ共も不審に思う。しかし・・・

「ふむ、・・・・・ミスタ・アルベルト、儀式の続きを」

やはり、この世界のメイジはバカらしい、ってか見ず知らずの女性にキスしろと？さすがの俺でもそれは気が引ける。なにより初めて

だし。

「ミスタ・コルベール。相手は女性ですので、さすがに一方的なものは善くないと思います。せめて事情を説明してからでもよいかと。」

「ああ、そうですね。それでは私達は先に戻ってますので終わったら来て下さい。」

そう言ってコルベールは生徒を連れてフライで教室に戻っていった。

・・・終わったらって、この娘使い魔にするのアノ人の中では決定かよ！とにかくこの娘を起こすか。

テイルズ　オブ　ゼロ　なんて題名を付けてみたり（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、ルイズは才人（変態）に惚れるぐらいだからリオンに一目惚れしても不思議じゃないと思います。
その2、リオンの術技はテイルズシリーズの全剣技、地闇の術を使います。
その3、ジンの能力は投影魔術（制限無し）、ニードレスの全フラグメント、身体能力及び魔法の才能の成長限界突破。

不幸のワイン煮込みチートソース添え（前書き）

このＳＳを書くに当たってゼロ魔とタバサの冒険の時期合わせをしたら、タバサの冒険の１話・６話・７話の時期が不明なことが分かったのでつじつまが合わせにくい１話と７話は書かない事にした。もしかしたら他にも面倒臭いストーリーを書かないかもしれない。とりあえず努力はする。

不幸のワイン煮込みチートソース添え

ジンSide

「あ、あの大丈夫ですか？」

俺は門から出てきて転んでからピクリとも動かない女性に声を掛ける。

「・・・・・・・・」

返事が無いまるで屍のようだ、・・・・・・っゆーかホントに息してるか？全然呼吸音が聞こえないんだが・・・

「ね、ねぇ君、大丈夫かい？」

もう一度たずねる、今度は彼女を揺らしながら起こそうとしたが・・・・・・なんか、冷たい。

「えっ？・・・・ちょっ！！！」

俺はあわてて彼女を仰向けにして抱きかかえるように上半身を起こす。まず呼吸・・・・してない。次！脈・・・・・・無し、え・・・・死んでる？・・・俺は恐る恐る彼女の顔を見る、血の通ってない真っ白な肌、紫の唇、そして・・・・・瞳孔が開きハイライトが消えた眼・・・・・・・・・・・・・が俺を見た・・・！！！！！！！！？？？！？

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

俺は驚いて彼女を思い切り投げ飛ばしてしまった。ハッキリ言って怖かった、昔オーク鬼や盗賊とかをミンチにしたり焼いたり斬ったりして死体には慣れてるけど、今のはソレとは違った怖さだよ。彼女は3階ぐらいの高さの宙を舞いそして、

グシャ！

頭から地面に落ちた。

「いったーーーーーーーーい！！」

彼女は頭のタンコブを両手だ押さえながらうずくまる・・・・・って

「なんでやねんっ！！！」

いや、だって！息が！脈も無かった！瞳孔も開いてた！！さらにはあの高さから頭を打って痛いですむとか！俺、絶対ヤバイなにか召喚したよ、外見は美少女でも実際は完全な人外だな・・・・あれ？そう考えれば俺最高の使い魔召喚したんじゃね？しかも美少女・・・・・・問題無いじゃん！むしろラッキーじゃん、俺のハーレム計画に1人美少女増えたんだから。なら、やる事は簡単。

「大丈夫かい？」

篭絡するのみ！

「え？あ、はい。ちょっと頭打っただけなので、えーっとどちら様でしょうか？」

「失礼、僕は名をジンと言いまして、貴方のお名前も御教え頂けな

いでしょうか。」

「はい、私は烏丸ちとせ、と申します。」

「じゃあチトセちゃんだね（ニコッ）」

決まった。チトセちゃんは顔を赤くして俯いてしまったが完璧だろ。ふふふ

「・・・・ブツブツブツ・・・で・・・きた・・・ブツブツブツ・・・（ニヤリ）」

ん？なんか言ってるが小声でよく聞こえない。
バァッ！
チトセちゃんが顔を思い切り上げて俺の顔を瞳を潤ませて覗き込むように見上げてくる。うわぁ、超可愛い。そして、
ゴフゥ！バタッ
盛大な吐血をして倒れた。

「えええええええええええええええええええええええええええええええ！！！！！！！！！！！！！」

もうどう対処したらいいのか解らない！

「ああ、実は私どんな高名で実力もある宇宙一の医者でも治せない不治の病に侵されているんです。ゴフッ、私は昔から体が弱く・・・・・・」

なんか吐血しながら自分語り始めちゃったよこの娘。うわぁ、篭絡とか言ってるレベルじゃないよ、ツッコミどころ満載な自分語りも

そうだけど不治の病って・・・あ、そうか！その病を俺が秘薬と魔法で治せば万事解決じゃないか！よし、まだ大丈夫だ問題は無い。

「・・・・・・だから、キスしてください！！！！ムチュゥゥゥ～」

・・・・・彼女が口を3の形にして突き出してくる。・・・・・・・・・・・ごめん、話しを聞いてなかった俺も悪いけどさぁ、一体なにがどーしてそうなった？前言撤回、問題有り過ぎじゃあ！！！ぬぐぐぅぅ、しかしどっちにしろコントラクト・サーヴァントでキスはしなくちゃいけないし・・・くっ、しょうがない。

「チトセちゃん・・・・」

「ムゥムゥムゥ」

俺は彼女の3の口にキスをする、すると

「ああっ！！！！！私の王子様ァァ！！！！貴方のキスのおかげでぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！？！？」

チトセちゃんは急に起き上がり芝居がかった感じでクルクル回りながら喋り始め、そして突如スッ転び首の後ろを両手で押さえながら地面の上でのたうち始めた。

「ぎゃぁぁぁぁぁぁぁ！！熱いぃぃぃぃぃ！首が燃えるぅぅぅぅぅぅ！！？」

おお、神よ。いつか貴様を殺す。

鬼奇Ｓｉｄｅ

いやー、ビックリした。だって俺の能力とかタバサの母親治せるって教えたら急に泣き出したと思ったらさらに俺に助けて欲しいとか言い出すし。うん、現実は厳しいと思ってたら実はそうでもなかった。それからは母親の治療の代わりに俺の生活を良くしてもらう事とルーンに制限を掛ける事を条件にし話し合いは終わり、２人で広場に戻っている。タバサにスクーターの事を聞かれたので答えられる範囲で答えた。

「おや？人が居なくなってる。」

「皆の召喚が終わったから教室に戻った。私達も行く。」

「あー、なるほど。」

みんなで空飛んで教室か、才人君はさぞ驚いただろうな。タバサは飛ばずに歩いて行く。俺も後に続きタバサを追おうとして、ん？あれ？俺は広場に人影が居るのに気づき足を止め目を凝らす。

「へ？」

そして俺はあまりの事にフリーズした、

「ん？どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

タバサが急に止まった俺を見て声をかけて来たがテキトーに返事をする。この場合、俺の取る行動はただ1つ・・・見てない、聞いてない、喋らない、だ。はぁ此処は原作世界じゃなかったよ、メンドクセー。
その後は2人で教室まで行き教師の話を聞く。まぁ入ったときに笑い声があちこちから聞こえたがどうでもいい。ちなみにルイズともう1人の生徒は使い魔の容態が悪いから2人は早退、コチラは教師曰く午後からは使い魔との交流で授業無しだそうだ。そんで話しが終わると俺達はすぐに教室から出て行く

「何処行くんだ?」

「私の部屋。」

「そうか。」

そんな感じで俺達は寮へと行く。しかししばらくして、

「ターバーサー。」

後ろから声を掛けられタバサが止まる。

「タバサ!見て見て、私の使い魔。サラマンダーよ!しかもこのツヤ、大きさ、そして尻尾の炎!どう考えても火竜山脈の物に違いなの!どお、微熱の名にふさわしいと思わない?」

わぁーお、なんかギャルっぽいの来たよ、俺こうゆう人苦手なんだよな〜。・・・・明鏡止水。俺は畏を発動させて認識出来ない様にする。このギャルのマシンガントークに入れられたく無いし。

「・・・・・・でね、ルイズったら物凄くカッコイイ人を呼び出したのよ！ハッキリ言ってルイズには勿体無いぐらいなの。あ、そう言えばタバサも人間を召喚したわよね？ソイツはどこに居るの？」

うわ、畏を使っておいて正解。

「彼ならそこに・・・」

タバサが俺の方を向くが、

「へ？居ないわよ？」

「・・・！？？？」

明鏡止水で認識できなくなっているので誰も居ないように見えてしまう。

「まぁいいわ、じゃあまた後でねー」

ギャルはひとしきり喋った後そそくさと行ってしまった。あの手タイプはホント苦手だ。俺は畏を解きタバサに声を掛ける。

「なぁ、あいつ何て名前だ？」

「！！！？？」

ブゥン！！

いきなり杖で殴られそうになったので避けた。

「危ないな。」

「何処にいたの？」

「ずっと此処に居たが」

「・・・うそ、居なかった。」

「ああ、それはただ気づかなかっただけだ。」

「・・・気づかなかった・・・だけ？」

「そゆこと。で、アイツの名前は？」

「キュルケ。」

キュルケか、よし覚え直したぞ。

「そうか、んじゃ部屋に行こ。」

俺はタバサの疑問をテキトーにはぐらかし部屋に促す。それからなんやかんやで部屋に着き俺は椅子に座る。タバサはベットに座り本を読み始める、・・・平和だな。・・・・・・・・お昼になった。

「そう言えば俺は飯、どこで食えばいい？」

「・・・厨房に頼んで貴方の分を追加してもらう。」

「わかった。」

あの場所で食うのか、後でテキトーに言い訳して次からは厨房で食

べさせてもらおう。

「それと、午後に貴方に頼みたい事がある。」

「ん？・・・わかった。」

・・・・・・昼飯を食った、周りの視線がウザかった、キュルケに遭遇して精神的に疲労した、次から厨房で食べられるようになった、以上。そして部屋に戻ると

「え？買い物？」

「そう、ここに書いてある本を買ってきて欲しい。」

俺はタバサからメモを渡された。

「・・・どこに？」

ってか、この世界の地理全然分からないのだが、それに文字も読めないし。俺はタバサにそのことを伝えたら、

「これ。」

地図を渡された。

「印を付けた。迷ったら聞けばいい。」

「・・・俺の条件忘れてないだろうな。」

「忘れてない、だから貴方も必要なものを買ってくるといい。」

タバサはそう言ってお金を渡してきた。

「むぅ、ならしょうがないか。」

貨幣の単価もよくわからないが何とかなるだろう。それにルーンに制限を掛けるのに人目の付かない所に行きたかったからちょうどいい。

「そんじゃあ、行ってくる。」

コクッ

タバサはそれに小さくうなずいた。俺は本と私物を買いにトリステインの城下町に行く。

不幸のワイン煮込みチートソース添え（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、烏丸ちとせはアニメバージョンです。しかも色々パワーアップしてます。
その2、ジンはチート能力で調子に乗ってますが基本ビビリです。
その3、鬼奇は正々堂々が嫌いです。

串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。（前書き）

シルフィードに関してはオリジナル任務で仲間にしようと思ってたけど、タバサの冒険第九話がちょうど良いストーリーだったのでそれを使う事にした。

串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。

イルククゥＳｉｄｅ

「きゅいきゅい！私、人間の居る所に行ってみたーいー。」

「イルククゥ、そんなわがまま言っちゃいけません。それに人間っていうのは昔から言うようにとても野蛮で残忍な生き物なの。人間は私達『韻竜』が絶滅したと思っているから安全に暮らせているけどもしばれたら捕まえられて酷い目に合うのよ。」

「そんなの精霊魔法で変身すれば問題ないのね、きゅい。」

「なにいってるの！大いなる意思の力をそんなくだらない事に使っちゃダメ。」

「ううう、もういいのね！」

私は竜の巣での生活が退屈で嫌で両親にいつも外に出たいと言っていたの。でも両親は外は危険だからと絶対に外には出してもらえなかったのね。そしてついに私は親と喧嘩して自分の巣を飛び出し近くの泉に家出してきてやったのね。

「もう知らないのね、今日から此処で暮らしてやるのね。此処なら魚も取り放題だから問題ないのね。」

そうだ、まずは寝床を、

「おや、イルククゥじゃないかね。こんな所に居るなんて珍しいね。

何かあったのかい？」

「きゅい！おじーちゃん！」

私はおじーちゃんに家出した事を話したのね。

「ふむ、なるほど。確かに外の世界はとても危険な事がいっぱい有るからなぁ、お母さんの言う事は正しいな。」

「きゅい！？そ、そんなぁ～。おじーちゃんもお母さんの味方なのね！」

おじーちゃんなら分かってくれると思ってたのに。

「うむ、わたしも可愛い孫を危険な目に合わせたくはないからなぁ。」

「きゅい～。私は全然平気なのね。そんなドジなんかしないのね。」

「ふむ、しょうがない子だな。なら少しだけ見てきなさい、お父さんとお母さんにはわたしが言っとくからね。ただし日が沈む前には帰ってくる事いいね」

「！？・・・ホ、ホント！やったーなのね。」

「ほれ、人間の服だ。変身したらコレに着替えるんだいいね。」

「わぁー！おじーちゃん大好きなの！」

私はおじーちゃんから貰った人間の服を持って竜の巣を飛び出した

のね！

鬼奇Ｓｉｄｅ

ふむ、空はいいと昔の偉人さんは言ってたが確かにその通りだよな。俺は今タバサにおつかいをたのまれてトリステインの城下町に移動中だ。移動手段は鳥型の式神を出しソレに乗って空を飛んでいる。スクーターが使えればよかったが、この世界じゃガソリンなんてある訳ないし、それに馬で３時間とか遠すぎて往復する前に燃料切れになる。

「お、アレか。・・・予想よりショボイな。」

しかも、なんかゴチャゴチャしててやだなぁ。あ、そういえばスリが出るんだっけ？・・・・明鏡止水を使えばいいか。とか考えてる内に町の上空に。

「あー、上空に来てどうすんねん俺。ま、いっか。」

明鏡止水発動。で、式神を消してっと。ヒューと俺は落ちていく。そして、
ドスンッ！！
と、着地。

「うわぁ！なんだ！」「地震か！」「ああぁ、お花が！」

・・・・・・ま、いっか、よくないけど。俺はそそくさとその場か

ら逃げる。さて、

「とりあえず、本屋行くか。先に代金払って本を取って貰っといて、残りの金で自分の買い物だな。」

本を先に買っても荷物になるし、私物を先に買っても本代が足らなくなったら困るし。

「えーと、本屋はどこかなぁ～♪。」

俺は本屋を探して町をぶらつく。しかしホントにゴチャゴチャしてウザったいな。

「きゅい～、なんでご飯が食べられないのねー！」

「金持ってねぇんだから当たりめぇだろ！さっさとどっか行け！商売の邪魔だ。」

・・・・・・・・・何か居たー！たしかに俺がタバサに召喚されたんだからアイツは召喚されずにこの世界のどっかにいるとは思ってたけど、まさかこんな所に現れるとは。接触するべきか？どうしよう悩むな。う～ん・・・・・・とりあえず、様子を見よう。そう決めた俺はアイツを尾行しようとしたが、

「あれ？・・・居ない。・・・・・・あー、こんだけ人がいたんじゃ見失うのはしょうがない。」

見失ったので諦めて本屋を探す続きをした。

「しかしアイツ、普通に服を着てたな。アイツの事だから布切れ巻

いて町を歩くものだと思ってた。」

そんなどうでもいい事を考えながら町を散策してたら、

「お！本屋らしき店はっけーん。」

俺は目的地を発見し、中に入る。右見て、左見て、うん、本屋だ。俺はここがちゃんと本屋だという事を確認して、店の店主らしき人に話しかける。

「おっちゃーん、このメモに書いてある本をくれ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

無視かよ。

「おいコラ、声聞こえてるか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

ガンッ！！

店のカウンターをそこそこな力で蹴ってやった。

「気づけやコラァ！！」

「な、なんだ！！何が起きた！」

おっちゃんはいきなりの事に驚いてあっちこっちキョロキョロしている。何してんだコイツ、客が目の前に居るのに気づかないのか・・・・・・あ。・・・・俺は一度カウンターから離れて店の外に出る。そ

して、店の横の路地に入り、・・・・・・畏を解除する。そして、
また店に入りカウンターまで行き、

「おっちゃーん、このメモに書いてある本をくれ。」

「ん？あーはいはい、ちょっと待っててね。」

おっちゃんにメモを見せる。さっきの失敗はしょうがない。

「はい、こちらになります。」

ドサドサッ！！
多っ！！もって帰るのメンドクセー。

「あの、後で取りに来るので本を預かって貰ってていいですか？これ代金です。」

「いいですよ。はい、お釣り。」

俺がテキトーに置いた金貨を数枚取り、銀貨と銅貨を渡してきた。・・・・・ダメだ、さっぱり単価がわからん。まぁいいや、俺は店を出で自分の買い物を開始する。

「・・・っと畏の発動。これしないとスリにやられる。」

そんなこんなで町をぬらりくらりと徘徊中。・・・・・・迷った、服屋ってどこだ？

「・・・あの、服を売っている店って何処にあるかしりませんか？」

俺は近くを歩いていた人に話しかける、もちろん畏は解除済み。

「あらぁ～ん、貴方珍しい格好してるのねぇ。この町ははじめて。」

わお！店長さんだった。普通の服着てるから全然分からなかった。

関わりたくなかったのに。

「ええ、似たようなものです。それでお店の場所を教えて欲しいんですけど。」

「いいわよ。でもどんな服がほしいの？それによってお店の場所が違うんだけど。」

普通のが欲しいんだけど、この人の基準の普通ってなんかヤバそう。

うーん、なんて言えば・・・テキトーに言えばいいか。

「えっと、極々普通の服なんですけど。」

「あら？貴族様の御使いじゃないの？」

似たようなもんだな。

「まぁそのついでに自分の買い物をしてる感じですね。」

「そうなの、それじゃあ地図持ってる？」

「はい。」

俺は店長さんに地図を渡す。

「えっと、今居るのがココだから・・・・お店はココよ。」
店長さんは地図を指差し丁寧にお店の場所を教えてくれた。普通に親切だ。
「ありがとうございます。それじゃ。」
「どういたしまして。あ、そうだ！貴方お名前は？」
名前を聞かれたので
「鬼奇と言います。」
「キキ君ね。私はスカロンって言うの、魅惑の妖精亭ってお店やってるから気が向いたら遊びに来てね、サービスしちゃわ。じゃあね。」
普通に自己紹介をし合った。スカロンさんはお店の宣伝を俺にして優雅（？）に去っていった。もうちょっとアレな人かと思ったら案外普通だった事に驚愕だ。
「ふむ、やっぱり先入観で人を見ちゃいかんな。そういえば昔堕ちたヤツを滅する時、余裕ぶっこいてたら逆に殺されかけたなぁ。傷が治って退院したら姐さんにこっぴどく説教食らった上折檻と言う名の拷問を受けたな・・・・アレでまた入院するはめになったんだよな。」
姐さん怖い！やべ、ホームシックになってきた。俺は独り言をブツブツ言いながら教えてもらったお店へ行く。

「お！なんか旨そうなもん発見。」

途中露天でよく分からない串焼きの様な物があったので数本買う。うーん、いい・・・

「良い匂いなのね。」

ジーっと俺の串焼きをガン見してくる青い髪の頭の弱そうな女の子が現れた。ヨダレを垂らすな！

「・・・・・食べるか？」

「ハッ！た、食べていいのね！！」

「ああ・・・いいぞ。」

目をキラキラさせて俺に詰め寄ってくる青髪少女って言うかシルフィード。今はまだ違うか、あれ？コイツのもう1つの名前ってなんだっけ？まぁいいや。俺は串焼きを渡そうとして、

「ありがとうなのね！」

バシッ！！

袋ごと全部奪いやがった。お前はもう少し慎みを覚えろよ！

「きゅい～！！ハグハグハグッ！」

俺がそんな事を思ってるとは露知らず、物凄い勢いで串焼きを食べていく。はぁ俺の串焼きがぁ～

「ったく、それじゃあな譲ちゃん。」

「ツング！美味しいものくれてありがとなのねー。」

俺はそそくさとその場から離れ本来の買い物に戻り服屋を探す。

「ん~、ココっぽいな。」

町を徘徊しながら思った事は飲食店以外の店は凄く分かりにくい。そんな事を思いながら店に入りテキトーに買い物をする。とりあえず、下着っぽい物はあったのは行幸だった。他には店主に頼んで作務衣や着流しを説明し作って貰ったりした。他にも色々買ったりしてなんやかんやで買い物も終わり、本も取りに行きそそして、

「帰る前にルーンをやっちまうか。」

そんで町から出て近くの森にひとっ走り。なんか森が全然見つかんなかったたから結構遠くに来たが気にしない。

「さすがにここら辺なら人は居ないよな。さて、」

俺はルーンに制限を掛ける為ポケットから御札を出し、印を組み、言霊を呟く。

「~~~~~~~~~~~」

「きゅいきゅいきゅいきゅい！！」

ドッガシャーン！！！

森の奥の方からバカっぽい声と何かの破砕音が聞こえた。俺はとり

あえず自分の作業を続ける。

ドーンッ！ヒュン！ガツンッ！

どこからか飛んで来た何かが頭に当たった。俺は作業を早回しで終わりにして、よし。

「ぶち殺す。」

串焼きを奪われた時は殴りたいとホントは思った。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、シルフィードが城下町に居たのは世界修正による偶然です。
その2、タバサが鬼奇に買い物を頼んだ理由はスクーターを使うと思ったから。
その3、鬼奇は頑丈なのでこの世界のショボイ銃の流れ弾では傷つきません。

悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。（前書き）

鬼奇「他にも、悪・即・滅とか言って気に入らないヤツを病院送りにしてた。」

ちとせ「私の先輩は悪人に人権無しと言って命乞いしてる人を滅殺しましたよ。」

リオン「お前等の知人は頭がおかしいのか？」

悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。

鬼奇Ｓｉｄｅ

俺は明鏡止水を発動させて音のする方に行き

「この竜・・・、突然現れやがって・・・、いったいなんだっていうんだ？」「誰かがこの竜に女になる魔法でもかけたんだろうさ」

「とにかく、仕事の邪魔だからやっちまおうぜ」

ガラの悪い男共に近づき拾った木の棒で・・・

ズヴァァッン！！！ズシャァアアアアアアアアア！！

思い切りぶん殴る、手加減無く。殴られた３人は白目をむいて吹っ飛んで近くの木にぶつかった。

「な、なんだ！！」「急に吹っ飛んだぞ！」「この竜！！なにしやがった！！」

わらわらと悪人面が出てくる、今更だが状況整理・・・脅えている女性達・・・馬車・・・ゴロツキ。

「お前等人攫いか？」

俺は畏を解きゴロツキに訊ねる。

「な！だ、誰だお前！！」「いきなり現れた・・・、魔法か！」

何も無い所からいきなり現れた俺にゴロツキ共が慌てふためくが

「あんたら落ち着きな。」

「あ、あねご。」「すいません。」

馬車の後ろからいかにも?私こいつらのリーダーです?的な女の人が出てきてゴロツキを落ち着かせた。

「ふん、だらしないねぇ。で、あんた、一体何者だい?」

リーダー女は俺に対し杖を見せつけ威圧感を与えてくる。ふむ、女はメイジでなかなかの強さを持っている感じか。・・・・・それだけだな、テキトーに潰すか。

「ん〜、亡霊かな?」

「はぁ?何言ってんだいあんた?頭のおかしいヤツか?」

確かに俺なに変な事言ってんだろ。

「いやいや、ホントだよ。他にも幽霊とかお化けとか色々な呼び方があるけど。」

「うふふふ。へぇ面白いヤツだねぇ、で、その亡霊のあんたが何の用だい。」

「ん?別にたいした事じゃないよ。ただ、人間の負の感情に呼び寄せられただけだし。」

自分で言ってて何だがこの理由は無いよな。

「それじゃあ私達に用は無いって事かい。だったら・・・」

「何言ってんの？俺は亡霊だよ。亡霊がやる事と言ったら１つしかないでしょ。」

「急に何言ってんのさ？それにやる事？」

「そう、亡霊がやる事。それは見つけた人間の皆殺し。」

俺はそう言うと近くのゴロツキの頭を木の棒で殴り昏倒させる。やべ、強く打ちすぎて頭から血出ちゃったよ。

「な！！この野郎！」「やっちまえ！」

他の奴等が怒りに任せて俺に攻撃をしてくるが全ての攻撃を避け、そしてカウンターでコチラの攻撃を叩き込む。頭を殴り昏倒させたり、手足をへし折り動けなくする。

「いい気にんってんじゃ無いよ！ウインドカッター！」

女が杖を振り、魔法を放つが

スゥ・・・

魔法は俺をすり抜け後ろに居たゴロツキに当たる。

「ぐあぁ！！」「な、すり抜けただと！」「ば、化け物！！」

俺の姿はそのまま消えうせ、そして

「言ったろ。俺は亡霊だって。」

女の後ろに現れ、そして俺は女の腹部に一撃を与えて昏倒させる。
「あ、あねごがやられた。」「に、逃げろー！」
ゴロツキ達は女がやられると一目散に逃げて行ってしまった。ついでに空気状態だった兵士達もいつの間にかいなくなってた。さてと、俺は縛られている女性達に近づき
「ひっ！こ、殺さないで！」
「ああ、安心しろ、さっきあいつ等に言った事は全部嘘だから。」
「ふぇ？」
俺は事情を話しながら全員の縄を解き、
「よし、今度から攫われない様に気をつけて暮らせよ。」
テキトーに解放する。でだ、
「お前は帰らないのか？」
「きゅい、私、助けてもらったお礼をまだしてないのね。」
なんか、いきなりだな。
「別にお礼とか要らない。」
「そんな事言わないでほしいのね。それに貴方には食べ物をくれたお礼もあるのね！」

ああ、確かに。でもあれは奪ったに近いものがあるぞ。って言うか俺は人間姿のお前には合っているが、竜の姿のお前には合ってない事に気づいてないのか？指摘してやるか。

「・・・俺は青髪の少女に食べ物を渡した覚えはあるが、喋る竜にあげた覚えはないぞ。」

「きゅい！！それは私なのね！」

おいおい、いいのかそれで？

「・・・・えーっと、それは人間に変身してたってことか？それとも今は竜に変身してるのか？」

もう、めんどいなぁ。

「この姿が本来の私なのね！アレは精霊魔法で変身してたのね。」

「あはははははは、なぁそれって喋ってもいい事なのか？」

「・・・・・・きゅい！！あわわわ、で、でも貴方も精霊の力を使ってたのね。と言うことはあなたは人間じゃないってことなのね！私って賢いのね。」

「何故、精霊魔法だと思った？」

「だって、杖も呪文も無かったのね。だから・・」

「まぁ確かに俺は人間じゃ無いが、俺、貴族の使用人やってるぞ。」

使い魔って言うと混乱するからな、多分。

「きゅい！そ、そんな。私をだましたのね！」

「勝手に喋ったのお前じゃん。それと、竜って普通喋るものなのか？」

「ハッ！わ、私は別に韻竜なんかじゃないのね！喋ってるのもえっと・・・そう！たまたまなのね！」

すばらしい言い訳だな。しょうがない、もうこうなったら流れに身を任せるぜ。

「分かった分かった。じゃあ、もうテキトーにお礼をしてくれ。」

「そ、そうなののね！お礼なのね。・・・何をすればいいのね？」

流れすら無い！なんてレベルの高い竜なんだ！・・・これって世界修正ってやつか？コイツを仲間にしろっ言う感じ？世界って怖いわぁ～。

「ああ、もうさぁ。俺のお願い聞いてくれって事でいいか？」

「それでいいのね。さぁドンッとお願いをいうのね！」

「それじゃあ、とりあえず今から案内する所まで連れてけ。そこで願い事言うから。」

「きゅい！わかったのね。」

「俺の名前は鬼奇って言うんだが、お前名前は？」

「私はイルククゥって言うのね。」

俺はその後荷物を持ってイルククゥの背に乗り学院に戻る。とりあえず学院の近くの森にイルククゥを誘導して降りる。

「よっと。ちょっと待ってろ、タバサを呼ぶから。」

「きゅい？タバサって誰なのね。」

「青くてちっちゃい女の子。後は来てからのおたのしみ？」

「きゅい？」

さて、鳥型は・・・・・っと、あった。

ボンッ！

俺は式神を実体化させタバサの部屋に飛ばす・・・・そういえばこの世界にツバメ居なかったけど大丈夫かな？まぁいいや、俺は式神とリンクしてタバサの部屋まで行く。

タバサＳｉｄｅ

パタパタ！ヒョコ

私が本を読んでいると見たことの無い鳥が窓枠にとまった。全体的に黒く、小さくて細い感じだ。しかしなんだろう？生き物って感じ

がしない、かと言ってガーゴイルの類では無いこの鳥は一体。など私が鳥をジッと見ていたら鳥がコチラを向き、

「コノ体ニモ、ダイブ慣レテ来タゾ。」

ズババババ！！

私は反射的にウィンディ・アイシクルを鳥に向かって放っていた。私にしては浅はかな事をしたと思うがしかし、さっきの鳥が言葉を発したら何故か？アレ？をイメージしてしまっていた。鳥は私の攻撃が当たったら紙になってしまった。

「これは？」

私はバラバラになった紙を拾いソレを観察する。妙な形をしている、それに変な模様が付いてる。私がその紙を見ているとパタパタ、ヒョイ！

また同じ鳥がやってきた。そして

「わりぃ、ふざけ過ぎた。俺だ鬼奇だよ。」

鳥は最初のヤツとは違い彼の声で喋り掛けてきた。コレも彼の言う能力と言うやつだろうか。

「コレは何？」

私は興味がわいたのでキキに尋ねる。

「これは、式神ってやつだ。マジックアイテムと思ってくれればいい。それよりちょっと相談があるからこの塔から左側にある森に来てくれ。」

キキがそう言って鳥を外に向ける。私は鳥を追うためにフライを唱え窓から飛び立つ。私は森に着き、キキを探しながら周辺を見渡していると、

「おーい、こっちだー。」

奥から声が聞こえそちらに向かう、するとキキと風竜が居た。風竜の方はあまり大きくないので幼生だろう。

「これ、どうしたの？」

「あー細かく説明すると面倒だから簡単に言うと・・・・・・拾った。」

「・・・ちゃんと説明。」

「あー、面倒だな。えっとだな・・・」

あまりにも適当過ぎる説明に私はちゃんとした説明を要求した。キキはとても面倒そうに風竜の事を説明し始めた。キキの説明を聞いて私はいくつか疑問が上がった。

「ってな感じ？で、説明終わり。質問は？」

「貴方の話を聞くとその竜が喋ったり変身したりする事になる。」

そんな事が出来る竜と言ったら絶滅した韻竜ぐらいだが、

「ああ、こいつ韻竜ってヤツらしいから、そのおかげだろ？」

「きゅい！？ちょっと！私は韻竜なんかじゃないのね！」

「まぁこんな感じで少々アレだが。」

ホントに韻竜だった、確かによく観察すると目の色や鱗が普通の風竜とは違う。

「わかった。それでこの竜はどうするの？」

韻竜は絶滅されたと思われているから他人に見つかりでもしたら大騒ぎになる。できればソレは避けたいところなのだが、その相談だったのだろうか？

「こいつをお前の使い魔代理にしようと思う、っと言う事でイルククゥ、今日からこいつがお前のご主人様な。」

「きゅい！！どういう事なのね！なんで私がこんなチビ助の使い魔にならなきゃいけないのね！」

「使い魔なら貴方がいる。」

私は彼が突拍子のない事を言い出したので反論する。確かに風韻竜を使い魔に出来ればとても役に立つが

私にはキキがもう居る。

「はぁ、イルククゥ、なんでも願い聞くって言ったじゃねーか、韻竜ってのは約束も守れない駄竜なのか？」

「なっ！？そんなことないのね！！私は偉大な古代の眷属の風韻竜

なのね約束を破るなんて恥知らずなことはしないのね！」

「さすが偉大なる風韻竜、じゃあ約束通り俺の言うとおり今日からタバサの使い魔代理な。」

「わかったのね！・・・・あれ？なんか変なのね？むむむ・・・」

・・・キキが風韻竜を説得（？）をしてから私の方を向く、次は私を言いくるめる積りだろう。

「タバサ。」

「なに。」

「もう、面倒だからペット感覚で飼っちゃえよ。」

説得でもなんでもなかった。キキは話術が効く相手にしか説得をしないみたいだ。

「世話はどうするの？」

「他の奴等の使い魔と一緒にしとけば勝手に使用人さん達が世話してくれるだろ。」

・・・自分で拾ってきたくせに他人任せとはどうだろうか？しかし否定できない。

「わかった。この子の事は私が先生に言っておく。今日は貴方がその子を世話をして。」

「おう、何とかしとく。」

彼はそう言ってあの子の所に行く、私はこの事を伝えるために学院の職員部屋に行く。そういえばあの子の名前を考えなければ、イルククゥのままでは流石に怪しまれる。

悪人はとりあえずフルボッコするべし！と昔、先生に言われた。（後書き）

どうでもいい補足情報

その１、これといって思いつかなかった。（ｂｙ作者）

一日目、滞りなく終了いたしました。（前書き）

鬼奇「そういえば使い魔のルーン、何が出た？俺は『ニュアージュ（雲）』だけど。」

リオン「僕は『ガンダールヴ』だ。」

ちとせ「私は『ヴィスィウー（悪徳）』でした。」

一日目、滞りなく終了いたしました。

ルイズＳｉｄｅ

「それはホントなの？」

私は彼の話を聞いたが何というか信じがたいという感じで言葉を返した。

「ああ、本当だ。」

「ココとは別の世界ねぇ。しかもショウジュツ？っていうのが魔法の代わりにあるって急に言われても信じられないわ。」

「ソレが普通の反応だな。昔の僕ならお前と同じ反応をした。」

彼・・・リオンは私にそう言い返してきた。私達は召喚の儀式の後意識を失った彼をジンに頼んでレビテーションで運んでもらった。そういえばジンも私と同じで人間を召喚していた、一体今回の儀式はどうなっているのだろう。その後リオンは夜まで目を覚まさず、先ほどやっと目を覚ましたので夜食を食べながらお互いの話しをして今にいたるという訳。

「ふーん、ねぇリオン、その変な仮面外さないの？」

「コレは今の僕が僕であるための物だ、それに大切な思い出でもあるからな。」

「へぇー。」

私にはよくわからない。男の子ってそう言うもんなのかな？

「ねぇ、リオンが使う晶術ってのを私見てみたいんだけど？」

「別にかまわないが僕は攻撃系の晶術しか使えないからココでは無理だぞ。」

「む、それならしょうがないわね。」

やっぱり私達が使う魔法とは違うのよね。

「ねぇリオンは元の世界にやっぱり帰りたい？」

この世界のどこかから来たのであれば時間を掛けてでも帰せるけど別の世界ならそうもいかない。私は少しだけ罪悪感を感じていると。

「先ほども話したが僕は本来なら死んでいたんだ、今更向こうに帰ろうとは思わない。まぁ未練が無いとは言えないが。」

リオンはそう言ってくれて私としては安心する。

「それよりも僕の寝床をもうちょっとマシにしてほしい所だな。」

リオンは皮肉気に部屋の隅にある藁束を見る。

「しょ、しょうがないじゃない！だって使い魔は何かしらの動物が出ると思ったんだから！」

「別に責めてる訳じゃないさ、出来れば藁を多くしてシーツと掛け

布団をくれればいいと言ってるんだ。」

「ふぇ？そんなんでいいの？」

私はリオンの要望に首を傾げる。

「ああ、旅をしていた時野宿なんてざらだったからな、それだけで寝られるとこは出来る。」

「へぇ～」

リオンは向こうでは旅をしていたと言っていたけどホントなんだ。

「でもリオン、今は私の使い魔なんだし、旅をしてる訳じゃないから別に遠慮なんていいのよ。ちゃんとした寝床ぐらい私が何とかしてあげるわ。まぁ今日はもう無理だからそこで我慢してね。」

「まぁ期待しておこう。今日のところは椅子で寝させてもらう。」

リオンはそう言ってそのまま俯いて休み始めた。私もベットに入り明かりを消す。

「おやすみ、リオン。」

「ああ。」

そうして私達は眠りに着いた。

ジンSide

「お前はホントに何なんだ！！」

俺は流石に彼女に向かって叫んだ。儀式の後俺は意識を失ったチトセちゃんとルイズが召喚したリオンをレビテーションでリオンはルイズの部屋へチトセちゃんは俺の部屋に運び、俺は彼女が起きるまで部屋でのんびりしていた。そして夜になってから彼女は意識を取り戻し改めて自己紹介しあったのだが、

「は？今更何言ってるんですか？さっき自己紹介したじゃありませんか。」

「そう言う事言ってんじゃないんだよ。アンタさっきから自分勝手な事言いすぎたって事を指摘してるんだ！」

俺が召喚したチトセちゃん・・・滅茶苦茶自分勝手なんだよ！！最初は俺も美人だし少しくらいはって思ってたけどこの世界の事や俺の事、チトセちゃんの立場を説明したら、

「チッとんだド田舎惑星かよ。」

とか言い出したんだよ！その後も

「ご飯たべたい」「お風呂は？」「このベットで私は寝るから貴方床ね」

・・・・ってなんだよ！自分の立場分かってるのかってーの！そんで俺がワガママ言うなら追い出すぞって遠まわしに言ったら、

「いいんですか？私、自慢じゃないですが他人から同情されたり哀れみを受けたりするの得意なんですよ。しかも貴方の本性まで知っている、意味解りますよね？」

逆に脅された！！悪魔だ、悪魔がいる。俺もここまで言われて大人しく引き下がる訳にもいかず、

「チトセちゃん君は不治の病なんだろ、僕ならそれを治せる訳だけど、どうする？」

俺は完璧な脅しを仕掛けたが

「ああ私、小さい頃から病弱だったもので今ではもう自分の意思で自由に病を発症させたり治したりする事が出来るのでご心配なく。」

と笑顔で言われた。もう人間技じゃないよ！俺はこのままでは打開策が見つからないのでチトセちゃんの事を聞き、対策を練ろうと思いチトセちゃんの事を聞いたが

「私は、トランスバール皇国軍近衛特別部隊ギャラクシーツインスター隊所属で主な任務としてはロストテクノロジーの回収や調査等、他にも反乱分子の鎮圧や・・・・・・・」

超ＳＦ単語の羅列をグダグダと聞かされた。そういえばさっきから宇宙とか惑星とかソレっぽい単語がたくさん出てきてたけどチトセちゃんってＳＦキャラだったんだね。オリキャラか？で、なんやかんやで今に至る。

「はぁ私ってなんて不幸なのかしら。王子様と思って唇を捧げたの

に中身はこんな残念な殿方だったなんて。はぁぁぁぁ～。」

「俺は大切な使い魔の儀式でお前の様なヤツが出てきて残念だよ。なんで召喚の門に入ってきたんだ？」

俺は一番の疑問を聞いてみる。

「別に好きで吸い込まれた訳じゃないですよ。先輩達と亜空間で離れてしまって1人で漂ってたら変な鏡の様な物に吸い込まれたんです。」

「へ？もうちょっと詳しく教えてくれ。」

コレは詳しく聞いておいたほうがいいと俺の勘がいっている。

「え～、話すと長いんでイヤです。」

「話せよ！？」

「はぁ～、しょうがないですねぇ。簡単に説明しますと、いつもの様に先輩達を貶め様と画策してヒ素を混ぜたケーキを差し入れにエンジェルルームに行ったらですね、ミルフィーユさんがまたロストテクノロジーを発動させてましてエンジェル隊の先輩方共々亜空間に吸い込まれまして、そしてさっき話した通りココに来たって訳です。疲れたんでちょっと飲み物持ってきてください。」

「そこに水あんだろ！」

しかし、アレだな・・・ツッコミどころが多過ぎて対処できない。貶める為にヒ素とか、死んじゃうじゃん！

「なあ、チトセちゃんの先輩達ってどうなったんだ？」

もしかしたらこの世界の何処かに居るかもしれないし。

「さあ？まだあの亜空間で彷徨ってるんじゃないですか？ふっ、いい気味ですね。いつも私を蔑ろにするからいけないんです。ざまーみろ！おーほほほほほほほ！」

わぁー、ホントこいつろくでもないなぁ。もういいや、寝よ。

「おい、もう寝たいから明かり消すぞ。」

「え？あ、はいそれではお休みなさい。」

そう言ってチトセちゃんはパジャマになって布団にくるまった・・・・・・・・・・一体何処からパジャマを出した？そして何時着替えた？もう俺は彼女の事で考えるのが辛くなり予備の布団に包まり寝た・・・・床で。

タバサＳｉｄｅ

「なぁ、お前の母親は何時治しに行くんだ？」

あの後部屋に帰ってきたキキが椅子に腰掛けながら聞いてきた。私は本当なら竜も手に入ったし、すぐにでも屋敷に帰りお母様の心を取り戻したいがしかし、あの男が屋敷に何もしてないはずが無く、

私が妙な事をすればどうなるか分からない。

「今はまだいい。」

「?、どうしてだ、泣くほど・・うおっ！」

ヒュンッ！ガッ！

私は横に積んであった本を投げつけた。・・・本は大切に扱わないといけないのに、キキがあんな事言うから悪いんだ。

「屋敷に監視が付いてる可能性がある。」

「ああ、なるほど。」

キキは納得した様子でさっきの本を拾ってテーブルの上に置いた。そういえばちょっと気になる事が、

「帰ってきたとき服が変わってたけど、どうしたの?」

「ん?風呂入ってきたからだけど。」

「・・・どこの?」

「地下にあったデカイ所。」

あそこは確か警護用のゴーレムがいて使用中は生徒以外は入れないはず。何故入れたのだろう?

「ああ、そうだ。忘れないうちに聞きたいんだけど、お前んとこの王様って使い魔いるか?」

「・・・・判らない。」

キキは突然あの男の事を聞いてきた。

「う～ん、タバサが知ってる範囲でいいから王様の事教えてくれ。」

キキが何故あの男の事を聞きたがるのか分からないが、私はキキにアイツの事を話し始めた。私がまだ子供だった頃、お父様ととても仲がよかった事、お爺様が亡くなった頃はまだ協力し合っていた事、少しずつお父様と仲たがいし始めた事、そしてお父様を手に掛けた事、お母様に毒を飲ませた事、私は無意識に感情を抑えて平坦な声で話していた。

「・・・・・なぁ、仲たがいし始めた頃、そいつの周りに見かけない奴等とか普段持ち歩かない物を持つようになったってのは覚えてないか？」

キキが私の話を聞いて当時の事に質問してきた。あの頃の伯父の取り巻き連中に見かけない顔、それに持ち物。

「・・・分からない。あの頃は城中が慌しかったから、でも妙な剣を腰に挿す様になった。」

「妙な剣？」

「詳しくは覚えてないけど、独特だったから印象はある。」

「・・・そうか。・・・・・・・・・あいつが召喚されたから可能性はあるな・・・・・。」

キキは返事をすると黙ってしまった。ブツブツと小声で何か言っているが聞き取れない。キキはしばらくすると、

「よし、寝よう。」

そう言って部屋の端に勝手に作った寝床に行き眠ってしまった。彼はたまに行動が唐突過ぎる。・・・夜も更けて来たので私も寝よう。本をベット横の棚に置き布団に入る。

一日目、滞りなく終了いたしました。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、ルイズの性格がとても丸いのはしょうがない。
その2、シルフィードは一度巣に戻ってから学院に住み着きます。

朝です。朝は寝るものです。太陽とかマジうぜぇ。

鬼奇Ｓｉｄｅ

チチチチと小鳥が喚く不愉快な朝。何故、太陽はこんなに眩しいのか・・・・あ〝ー溶ける。俺は日が当たらない様に布団を被り包まろうとして、
バサッ

「朝。」

タバサに剥ぎ取られた。起きたくない。

「起きる。」

「朝なんてこの世から無くなればいい。」

ゴンッ！
頭を杖で殴られた、痛い。

「起きる。」

「あ〝ー、分かったから杖を構えるな。」

俺はヨタヨタと寝床から起き上がり体を伸ばす、

「これ。」

タバサはそう言って俺に水とタオルが入った桶を渡してきた、

「あんがと。」

俺は受け取って顔を拭く。ついでに髪を濡らして整える。ってか

「・・・・・・すばらしきかな、ヒモ生活。」

「ヒモ？」

「いや、何でもない。」

タバサにはヒモの意味は分からないよな。うん、ヒモはやだなぁ。まぁ実際は使い魔だけど、そんなこんなで準備を整え部屋を出ると

「うるさい！キュルケのバーカ！！」

通路の奥の方からくぎゅボイスが聞こえてきた。朝から元気だねぇ、

「バカって何よ！ゼロのルイズのクセに！！」

俺はタバサを見るとタバサはテクテクと声のする方へ歩いていったので

「タバサー、厨房に行ってるからなー。」

俺はタバサにそう声を掛けてから厨房に向かった。さて、昨日の事を思い出しながら現状の情報整理だ。まず、このゼロ魔世界は原作世界ではなくクロス世界であるという事。主人公組以外でもイレギュラーが在る事。うん、整理するほど情報無かった。そんな益体の無い事を考えながら厨房の裏口に着く。中を覗くと忙しそうに皆さ

ん働いている。

「落ち着くまで待った方がいいかな？」

俺はとりあえず厨房が落ち着くまで扉の横に座りのんびりする。で、しばらくしたら向こうからメイドさんと仮面の騎士ってかリオンがやって来た。

「あら？こんな所でどうなさいました？」

メイドさんが聞いてきたので

「ああ、飯を食べに来たんだが忙しそうだったから落ち着くまで待ってる。」

俺は簡単に答える。

「そうなんですか。えっと確か昨夜、ミス・タバサが言ってた使い魔さんですよね？」

「おう」

「ならお話しは伺ってます。たぶんもう厨房も落ち着いたと思うんで、リオンさんと一緒にどうぞ」

そう言ってメイドさんが中に入っていく。俺と彼はそれに続いて厨房に入っていく、すると

「お！シエスタ、戻ってきたか！ん？後ろの２人はなんだ？」

まさに親方と言う呼び名がピッタシな人が現れた。

「マルトーさん。こちらの人達は例の使い魔さん達です。朝食を頼まれたので賄いをお願いしたいんですけど。」

「おお！そうか。お前さん達も大変だなぁ。貴族のガキ共に召喚されちゃあな。ちょっと待ってろすぐに用意してやる。シエスタ！」

「はい！」

2人はそう言って奥に行ってしまった。俺達はとりあえず近くのテーブルに着く。・・・・・奥のほうで鍋が煮える音、食材を切る音、洗い物をする音、俺達は互いに喋らず唯々静かに待っているだけ。そんな何でも無い、はたから見たらとても声を掛け難い状況で、

「マルトーさん！！ちょっ頼みが！」

奥の方から大きな声が聞こえてきた。その後は奥でなんやかんやがあって、そして奥から髪の長い黒髪の女の子・・・烏丸ちとせがやって来た。

「どうも、おはようございます。」

「おはよー。」

「ああ。」

挨拶をしてきたちとせに俺とリオンはそれぞれ挨拶を返す。

「えっと、お2人はもしかして私と同じで使い魔なんでしょうか？」

ちとせが席に座りながら話しをしてくる。

「おう、そうだ。」

「ああ。」

「まぁ！そううなんですか！よかったぁ～、人間の使い魔は私だけだと思ってたんですが仲間がいてよかったです。それじゃあ今日から私達？友達？ですよね！」

なんか友達を凄く強調してきたけど、

「あ、自己紹介が遅れました。私は烏丸ちとせ、と申します。気軽にちとせとお呼びください。」

「んー、俺は音深之珠鬼奇。鬼奇と呼んでくれ。」

「・・・リオン・マグマスだ、呼び方は好きにしろ。」

そんな感じで互いの自己紹介をし合っっていたら

「お待たせしました。おかわりはたくさん在るので欲しかったら言って下さいね。」

シエスタがそう言いながら朝食を持ってきてくれた。

「ありがとうございます。」

「すまない、いただく。」

「どうもありがと。」

ちとせ、リオン、俺の順にお礼を言っていく。その後は3人でワイワイと話しをしながらというよりちとせが1人で喋りまくって俺が相槌を打つ感じ。リオンは直接話をふられた時のみ話し返していた。で、それぞれ食事を終え、

「おちそうさまー。」

「おいしかったです。」

「とても美味かった。」

「はい、それはよかったです。」

俺達はシエスタやマルトーさん達にお礼を言い厨房を出る。

「お2人はこの後どうするんですか？」

食堂入り口付近に来た時にちとせが聞いてきたので

「俺はタバサについていく予定だけど。」

「僕も同じ様なものだ。」

俺とリオンは答える。そしたらちとせが

「それじゃあ私も付いていって良いですか？」

「まぁ、別に。」

「好きにしろ。」

付いてきたいと言ったので俺とリオンはテキトーに返す。

「ホントですか！よかったぁ～、私ジンさんに『お前は絶対に来るなよ』って言われてましたがお二人が誘った事にすれば万事解決ですね。一人で学園内を徘徊なんてそんな寂しい事やってられません。お二人には感謝します。」

う～ん、返答に困るような事を言うなぁ、リオンも厭きれた顔してるよ。今更だがこの面子にはツッコミが足りなさ過ぎだな。そんなこんなで時間が経ち食堂からタバサ達が出てきた。

ちとせSide

ああ！なんていい人達なんでしょう。あのエンジェル隊の人達と違って私を蔑ろにしないし、話しも聞いてくれる。私こんなに幸せでいいのでしょうか、いや・・・いいに決まってます！だっていままで私がどれだけ不幸だったかそれは・・（省略）・・・な訳ですし。ハッ！私ったらつい物思いに。さて私も皆さんの後に・・・・・・

「って、いない！？」

そんな・・・さっきまでそこにいたのに。また、私をハブるんですね。鬼奇さんにリオンさん・・・友達だと思っていたのは私だけだ

ったんですか。ああ、私っ・・・（省略）・・・ぐすんっ。

「くっ、こんな事で私はへこたれません。こうなったら自力で・・・ってあら？ポッケになにか？」

なんでしょう？ポッケから紙が出てきたので読みましょう。

「これは・・・鬼奇さん！私は信じていました。やはり持つべきは友ですね！こんなふうにメモを残してくれるなんて、えっと『先に教室にいきます。頑張って。』・・・教室の場所を書いてくださいよ！？」

信じた私がバカでした。所詮人間なんて信じれるのは自分のみと言う事です。仕方ありません。

「自力で探します。幸い私はこういうのは得意ですから。」

と言う事で私は皆さんが向かった教室に向かいます。ロストテクノロジーの探索で古い建物の遺跡に何度も行ってますし構造は似た様な物でしょう。楽勝楽勝。

「・・・・・・ここは何処でしょう？」

迷いました。おかしいですね？確かこちらに人の気配がしたと思ったんですが・・・・・あ！居ました。

「くっやっぱり魔法はダメか、ま、焦っても仕方ないね。じっくりやるさ。」

「あのすいません。」

私は大きな扉の前にいる女性に話しかけます。

「!?・・・な、誰!」

「あ、すいません。私烏丸ちとせと言います。」

「・・・こんな所で何を?」

「えーっと実はお恥ずかしながら少々迷ってしまいまして、それで教室の場所を教えてもらえないかと。」

「え?あ、あーそうなんですか。それでしたら私が案内してあげますよ。何処の教室ですか?」

なんて親切な御方なんでしょう、困っている私を助けてくれるなんて。えっと皆さんが行った教室は・・・・

「どこでしょう?」

「へ?あの、何処と私に聞かれても・・・、えっとその教室の生徒の名前はわかります?」

「あ、それなら分かります。ジンさんと言う方なんですけど。」

「ジンってもしかしてミスタ・アルベルトの事ですか?」

確かジンさんはそんな名前で呼ばれてましたね。

「はい。」

「その失礼ですがミスタ・アルベルトとはどういうご関係で？」

「えっと使い魔って事になってます。」

「使い魔？・・・ああ、では貴方がミスタが召喚したと言う。分かりました、今からご案内しますね。」

「ありがとうございます。」

これでやっと教室に行けます。ホントにこの人には感謝感激です。私は女性、ロングビルさんと言ってこの学園で秘書をやっている方に案内され教室に行きました。

「ここですよ。」

「本当にありがとうございました。このお礼はいつかしますね。」

「別にいいですよ。ではこれで。」

ロングビルさんに教室前まで案内してもらって私は彼女にお礼を言います。さて私は教室に入りますか。

ガラッ

「へ？」

「・・・・・・」

「・・・お。」

私が扉を開けようとしたら先に扉が開き中から鬼奇さんとちっちゃい女の子が出てきました。あれ？もしかして終わっちゃいました？私がオドオドしていると、

「ちとせ、こっち来い。」

鬼奇さんが少し離れた所から手招きしてきました。隣にはさっきのちっちゃい女の子が座って本を読んでいます。なんか見た目がミントさんに少々似てますね、小さくて髪が青いのとか。私は困惑しながら鬼奇さんの所までいったら、

ドゴォーン！！

教室が爆発しました。何が起こってるんですか！？

朝です。朝は寝るものです。太陽とかマジうぜぇ。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、鬼奇は朝が大嫌いです。朝日は敵です。
その2、鬼奇は相手から話しを振られないと基本的に会話が出来ません。

主人公が主人公っぽくない上に中身も無い（前書き）

鬼奇「この作品って主人公俺だよな？」

リオン「今更何を言ってる。」

ちとせ「実に残念ですね！（喜）」

主人公が主人公っぽくない上に中身も無い

ロングビルＳｉｄｅ

「ふぅ、まったくヒヤヒヤしたよ。まぁあの子は迷ってただけみたいだしバレてないだろ。」

私はそう呟きながら学園長室に向かう。しかし宝物庫の扉はどうしたもんかねぇ、あのエロジジィに媚売って学園に侵入できたけどお宝を盗れないんじゃあ意味無いしさて。私は今後の算段を考えていたら学園長室に着いた。

「ふむ、まぁゆっくり調べるか。焦って正体がバレたら元も子もないからね。」

私は小声でそう言った後気持ちを切り替えて、

コンコン

「失礼します。」

「おお、ミス・ロングビル少し遅かったが用事はすんだかね？」

部屋に入るとエロジジィじゃなかった学園長のオールド・オスマンがそう聞いてきた。

「すいません。迷っていた使い魔の娘を案内していたら遅れてしまって。」

「使い魔とな？」

「はい、例の人間の使い魔でミスタ・アルベルトの召喚した娘です。」

私は仕事机に着きながら答える。

「おお、例の使い魔か。いやはや今年の使い魔召喚の儀は不思議じゃのぉ。ほっほっほ。」

ジジィはそう言って水ギセルを引き出しから取り出す。私はあまりあの煙の臭いが好きでは無いのでキセルをジジィから取り上げる。

「年寄りの楽しみを取り上げて、楽しいかね？ミス・・・・」

「オールド・オスマン。あなたの健康を管理するのも、わたくしの仕事なのですわ。」

私はもっともらしい理由をジジィに言う。

「こう平和な日々が続くとな、時間の過しかというものが、何より重要な問題になってくるのじゃよ。」

「オールド・オスマン」

「なんじゃ？ミス・・・」

「暇だからといって、わたくしのお尻を撫でるのはやめてください。」

このエロジジィが！酒場で合った時から人の尻を何度も触りやがっ

て。

「あ〜〜、う〜〜〜」

「（イラッ）都合が悪くなると、ボケた振りをするのもやめてください。」

私はとにかく声を抑えて冷たく言い放った。

「真実はどこにあるんじゃろうか？考えたことはあるかね？ミス・・・・」

「少なくとも、わたくしのスカートの中にはありませんので、机の下にネズミを忍ばせるのはやめてください。」

「モートソグニル」

ジジィが名前を呼ぶと私の机の下から白いネズミが出て行った。

「気を許せる友達はおまえだけじゃ。モートソグニル。」

このクソジジィ、使い魔のネズミに私の下着を毎度覗かせやがって。学園の宝を奪うまでの辛抱だと思っていたがこれ以上のセクハラしようものなら、

「オールド・オスマン。」

「なんじゃね？」

私はネズミから下着の色を聞いているジジィに

「今度やったら・・・・潰しますよ？」

「ひぃっ、そ、その程度の脅しでこのワシが屈するものかー！」

無駄に迫力出してんじゃないよ、ただのエロジジィのクセに。

「下着を覗かれたぐらいでカッカしよって！そんな風だから、婚期を逃がすのじゃ。はぁ～～、生き返るのぉ～～。」

うふ♪

ガコッ！ゲシッゲシッゲシッ！！

私は無言でエロジジィを蹴りまわした。特に下半身を集中的に

「あー！ごめん。やめて。痛い。もうしないから。だからそこはぁぁ！！」

ジジィが何か言ってるがそんな事は無視して私はとにかく踏み続けた。主に足の付け根辺りを。

「やめてー。い゛だっ！あんたそれでも人間か！？年寄りになんてことをぉぉぉ。」

ガチャッ！！

「オールド・オスマン！！」

「なんじゃね？」

私達は部屋に誰かが入ってきた瞬間にそれぞれ元の位置に戻り何も

無かった様に取り繕う。私はともかくジジィはなんであの状態から元に戻れるんだ？

「た、た、大変です！！」

いきなり部屋に入ってきたのは最近よく私に声を掛けてくるコルベールとか言う教師だ。まったくタイプじゃないし、いい迷惑なんだよね。ジジィと何かを話しているようだが一体何を？ブリミルがどうとか、少しするとジジィが

「ミス・ロングビル。席を外しなさい。」

真面目な、学園長としての真面目な声でそう言ってきた。私はそれに従い大人しく部屋を出て行く。下手に居座ろうとして怪しまれたら面倒だからね。私は部屋から出るとやる事もないので宝物庫の調査をしに行く事にした。

リオンＳｉｄｅ

「ふう、これでいいだろ。」

僕は手に持った雑巾を置き皆に言う。

「そうですね、これだけ綺麗になればいいですね。」

そう返してきたのはちとせだ。今この教室には他にもルイズ、キキ、ジン、タバサ、の６人の人間がいる。

「そうだな、存外早く終わったな。」

ジンがそう言いながら魔法で掃除道具を仕舞っていく。

「まあ、5人がかりでやれば早いよな。」

キキがそう言う。教室には6人いるがタバサは端で本を読んでいただけで掃除には参加していない。

「すまない、助かった。僕とルイズだけだったら昼まで掛かっていた。」

僕は皆に礼を言うが何故かルイズは端っこで俯いたまま何も言わない。

「おい、ルイズ。お前も礼ぐらいしないか。」

僕はルイズにそう言って近づく。すると

「別に・・・手伝ってなんて・・・言ってない。」

ルイズはふて腐れた様にそう呟いた。まったくコイツは・・・

「お前はバカか。頼んでも無いのに手伝ってくれたんだ、礼ぐらい当然だろ。」

僕はルイズの身勝手な発言にをたしなめる。しかしルイズは

「っ！バカってなによ！！私は手伝って欲しくなんか全然無かった

し、それにどうせ皆心のなかでは迷惑がってるんでしょ！！恩着せがましいのよ！」

急に怒り始めて周りの者達に八つ当たりし始める。さすがにこの発言は看過できない。

「おいルイズ、今の発言は失礼だ。お前は・・・・」

「まあまあ、別に僕達は気にしてないからさ。」

僕がルイズを叱ろうとしたらジンが横から声を入れてきた。

「ルイズも別に迷惑なんて思ってないよ。友達が困ってたら手伝うのが当たり前だよ。」

「そうですよ、ジンさんの言うとおりです。友達は助け合うもの、助け合いに友達、なんていい言葉でしょう。」

ジンとちとせはルイズを元気付けようと声を掛ける。

「・・・・・・っ、」

しかしルイズはそっぽを向き更には

タッ！

教室を飛び出して行ってしまった。まったく世話の焼けるヤツだ。

「あ、ルイズさん！あの、追っかけなくていいんですか！？」

ちとせが僕にそう言って来たが、ハッキリ言ってあの手合いは追いかけてもコチラの話しを聞かないどころかさらに不機嫌になってし

まう。しばらくほっといて落ち着くのを待つのが無難だ。

「別にかまわん。一人にして少し頭を冷やしたほうがいい。」

僕はそう言った。しかし、ちとせにはそれが気に入らないらしく。

「なんでそんな酷い事言うんですか！ルイズさんは傷ついているんですよ。リオンさんが追っかけて優しい言葉を掛けて上げなくてどうするんですか！？いいですか、女の子と言うのは・・・・・」

ちとせがクドクドと話し始めてしまった。こいつは話し始めると周りが見えなくなるからほっとけばいい。僕は改めて皆に礼を言おうとしたがキキとタバサはいつの間にか居なくなっており、ジンはちとせに魔法を掛けて眠らしていたので僕はジンに一言声を掛け教室を出た。

ルイズＳｉｄｅ

なんなのよ！私だって皆が親切にしてくれてる事ぐらい分かってるわよ！・・・・・・ううぅ～、あーもう！！

「大体リオンはもう少し私に優しくするべきよ！いつもいつも何かあるとバカバカって、私はリオンの御所人様なのよ！」

さっきまで憂鬱だった気持ちがリオンへの不満でイライラに変わってきた。しかもこうゆう時に限って

「あら？ルーイーズ。こんな所ほっつき歩いてどうしたの。貴方が爆破した教室の掃除はもう終わったの？あ、もしかしてリオン一人に押し付けて来たんじゃないんでしょうね？ソレはさすがにかわいそうじゃない？」

出やがった。この無駄乳女、キュルケ。チッ、たれてしまえ！

「あんたには関係ないじゃない！」

「そんな事言わなくてもいいじゃない。彼とってもカッコイイしい男じゃない。」

また、なんか言い始めた。どうせいつもの盛り内容だろ、気分も冷めちゃったから相手する気にもならない。私はキュルケを無視して歩いていこうとすると

「ちょ、何処行くのよ。ねぇ待ちなさいって。」

「あーもう、なんなのよあんた？」

「ルイズこそどうしたのよ？いつもだったらキーキー言い返してくるのに。何？ホントにリオンと喧嘩したの？」

「違うわよ！もうほっといてよ、私今すっっっごく落ち込んでんだから。」

「え！？ちょ！ルイズ！！待ちなさい！」

私は一人にして欲しいだけなのにキュルケは突然人の額に手を当てて

「・・・・・・熱は無いわよね。頭も・・・ぶつけた様な痕はない。ルイズ、とりあえず医務室にいきましょ？」

とても心配そうな顔で言ってきた。

「って、私が落ち込んでちゃあ悪いかー！！」

「あら、元気じゃない。落ち込んでるって言うから心配したのに・・・・頭の。」

「なに！？頭のって！私は何ともないわよ！いいから一人にしてよ、もう。」

「なによー、いいじゃない。そうだ、外で一緒にお茶しましょ。」

私の話しを聞かないキュルケは一人で勝手に話しを進めて私を無理矢理外に連れ出した。はぁ、まったく。

主人公が主人公っぽくない上に中身も無い（後書き）

どうでもいい補足情報・・・・・は思いつかなかったから無し。

主人公ペアがまったく会話をしないんだけど・・・・・・どうしよう。（前書き

ちとせ「お二人はホント喋りませんね。」

リオン「無駄口は好かん。」

鬼奇「会話が苦手だから。」

主人公ペアがまったく会話をしないんだけど・・・・・・どうしよう。

タバサＳｉｄｅ

「何をやっているの？」

時刻はお昼ちょっと過ぎ。私は友人であるキュルケと彼女が誘ったルイズとデザートを一緒に食べていたら、何故かキキがデザートを配っているのを見つけた。

「いや、成り行きで。」

「説明。」

別にキキの事を責めようとしてる訳では無いが、なんと言うか・・・気になる。

「・・・・・・ちとせがご馳走になってばかりでは人としていけません、皆さんで厨房の手伝いをしましょう。って言い始めて、ほっといたら・・・・手伝う事になってた。」

「そう、わかった。」

なんて言うか、彼らしい理由だ。とりあえず理由を聞けたので私はデザートを食べ始める。相変わらず美味しい。しばらくしてルイズも自分の使い魔が支給の手伝いをを見つけたらしく彼を呼んで文句を言っている。使い魔の方は厭きれたのかさっさと別のテーブルに行ってしまい、それにルイズがさらに文句を言い少し騒がしい。

「まったく！リオンの奴！」

「あらあら、ルイズは彼に相手されなくて寂しいの？」

「そ、そんなわけないじゃにゃい！？」

「はいはい、そうですねー。」

キュルケが何時ものようにルイズをからかって遊んでいる。この時のキュルケはホント楽しそうだ。そんな様子を眺めていると

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

後ろの方から男子達の声が響いてきた。とてもうるさい。

「つきあう？僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね。」

ハッキリ言って馬鹿話を大声でされてとても迷惑だ。私はいつもの場所に移動しようか考えてると、

「あの、すいません。これポケットから落ちましたよ。」

女の人、確かちとせと言う人が何かしらの入れ物を薔薇を持った男子、ギーシュに渡そうとしているが彼はそれを無視して周りの人と話しをしている。

「？・・・あの！落ちましたよ！」

ちとせは聞こえてないと思ったのか、大きな声でまたギーシュに話

しかける。

「・・・・・なんだね。」

ギーシュは嫌々な感じでちとせに答える。

「あの、コレ貴方のですよね？」

「・・・・違うよ。それは僕のじゃない。」

ギーシュはちとせが見せた入れ物を見ることも無くそう答えた。するとちとせは

「あ、そうなんですか。分かりました。」

そう言って拾った入れ物をポケットに仕舞い、スタスタと去ってしまった。ギーシュはそれにホッとしてまた話しを始めた。しかし、

「ジンさん！見てください！綺麗なビンを拾いました！！」

少し離れた別のテーブルでお茶をしていた彼女の主人であるジンの元に行くなり大声でそんな事を言い出した。

「しかもこれ、香水みたいなんですよ。凄くいい香りでこんなに良い物を只で手に入れられるなんて、私とても幸せです。」

ちとせは幸せそうにビンを握り締めているが、ジンは頭を抱えている。ギーシュに関してはダラダラと汗をかき始めた。すると同じテーブルに居た女子の一人、モンモランシーが

「ねぇ貴女、そのビン少し見せてもらっていいかしら？」

「はい、いいですよ。」

そう言ってちとせからビンを受け取り、マジマジとビンを観察して。

「ありがとう。それは貴女が自由に使うといいわ。」

ちとせにそう言ってビンを返し、代わりに置いてあったワインビンを掴みギーシュに近づいていく。

「ギーシュ・・・・・どういう事かしら？」

「や、やあ、僕の愛しのモンモランシー。そんな怖い顔をしてどうしたんだい？美しい顔がだいなしだよ。」

モンモランシーの問にギーシュは声を震わせながら答える。

「そう言う事を聞いてんじゃないのよ。なんで、私のあげた香水を自分のじゃ無いなんて言ったのかしら？」

「そ、それはだね。えっと・・・」

ギーシュがしどろもどろになって答えに窮していると、

「うううぅ、ギーシュ様。やっぱりミス・モンモランシーと・・・・」

「ケ、ケティ！？えっと、コレはだね違うんだ。」

パシンッ！

「うそつき！さようなら！！・・・うわぁ～～～ん。」

「うぐぅ、誤解だケティ！」

「へぇ～～～。違うんだ？誤解だ？・・・・・なるほど、よーーーーーーーく分かったわ。ギーシュ」

「ひっ！、えっと、その、コレはね、その～。そう！彼女は・・・」

「ふんっ！！」

ガシャーンッ！！

「がっ！」

「さようなら、ギーシュ。もう二度と話しかけないで。」

一通り見ていたが見事な修羅場だった。

鬼奇Ｓｉｄｅ

う～～～～～～～ん。これ、どうなるんだ？確かこのイベントってルイズの使い魔の人がなんだかんだで決闘になるんだよな？しかし、どう考えてもリオンとギーシュの決闘のためのフラグが見当たらない。まぁ、いっか。俺は関係ないし。

「・・・・・君。ちょっとこっちに来たまえ。」

あ、ギーシュが立ち直ってちとせに話しかけたが・・・・ちとせは完全無視だ。ってか自分に話しかけられてることに気づいてない。それがギーシュの堪に触ったらしく、

「そこの髪の長い君だ！聞こえてるだろ！」

ちとせに薔薇の造花を向けて叫んだ。それでやっと気づいたちとせは

「どうかしましたか？」

普通に返事をした。今までの過程を見ている人達からすれば何故そんなに普通なのか疑問に思うが、そこは烏丸ちとせ、被害妄想が激しいくせに他人の悪意に鈍感だからと言う以外に理由は無い。

「なんですか。じゃないだろ？君のせいで二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

ギーシュはスッと足を組みキザなポーズをとって、ちとせに言いがかりをつける。

「・・・・・・・えっと、どちら様ですか？」

しかし、言いがかりをつけられたちとせは、その理由どころかギーシュの存在すら忘れていた。

「なっ！？君は失礼な奴だな！！さっき君が拾った香水の持ち主だよ！」

「あー、思い出しました。でもこの香水は貴方のじゃないですよね？私、確認したら違うって言ってましたし。」

「そ、それは君・・・なんていうか、そう！貴族である僕の話に合わせるのがメイドの務めだろ。それなのに君は勘違いして、勝手に自分のだって言いふらして。そのせいで可憐な乙女達が傷ついてしまったのだ！」

二人の言い合い？を眺めていたが・・・・ギーシュ凄いな、あんな言い訳を即座に思いつくとは。そのスキルを先ほどの二人に発揮出来ればよかったのにな。その後もギーシュとちとせはやんややんやと言い争い、そして、

「じゃあ、もう決闘です！！」

ちとせがギーシュに決闘を申し込んだ。

「ああ！いいだろう！平民風情が貴族である僕に挑んだ事、後悔させてやる！」

ビシッとギーシュは造花をちとせに向けてポーズをきめる。ホント何やらかしてるの？ちとせ。

「ふっふっふ、後悔するのはどっちでしょうね？」

「ふんっ！決闘はヴェストリの広場でおこなう。着いてこい。」

ちとせが何故か自信満々に胸を張り、ギーシュは決闘場所を指示して歩いて行く。ああ、なんかどんどん話しが進んでいく。

「何やってんのかしらねぇ。ギーシュもバカだけど、あの子・・・ちとせって言うんだっけ？あの子も相当よね。」

キュルケが今のやり取りを見てそう呟いた。

「まぁ～そうね。ねぇジン、ほっといていいの？」

「もう、自由にさせるよ。」

ルイズもキュルケの言葉に同意して、何故か同じテーブルに移動してきたジンに話しかける。ジンはゲンナリした顔で返答した。

「あの、ジンさん。」

そうこうしていると、ちとせがこちらに近づいてきて、

「ジンさん！決闘頑張ってください。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何故、そう言う考えに至ったのか教えてくれ。」

ちとせは理解が難しい事をジンに言った。ジンもそれを聞いて頭を抱えながら、聞き返した。

「ほら、昨夜言ってたじゃないですか。使い魔はメイジの大切なパートナーだって、それに使い魔の責任は主の責任だからって。だから私の代わりに決闘してきて下さい。」

ちとせはそう言ってジンに対してニッコリ微笑んだが、

「ぶちのめすぞ！！」

ジンがキレた。今の発言とキレ方に周りの人達は目を点にして止まってしまった。特に女子生徒。猫を被っていたのは分かっていたが、人目があるところで素を出すほどちとせにストレスを感じていたのか、可哀そうに。

「あ、いや・・・・・・・・・ちとせ、ちょっとこっちに。」

ジンはちとせを連れて建物の裏の方に行ってしまった。

「えっと・・・・ビックリした～。ジンが怒るところなんて始めて見た。」

「ええ、そうね。でもアレがたぶん本当の彼かもね。」

ジンがキレた事でルイズとキュルケがジンの事を話してるとジンとちとせが戻ってきて、ジンは椅子に座り、ちとせはリオンに近づき、

「私、代わり、決闘、お願い。」

決闘代理を頼んだ。ってか何故そんな喋り方！？目もなんか虚ろだし。

主人公ペアがまったく会話をしないんだけど・・・・・・どうしよう。（後書き

どうでもいい補足情報
その1、ジンはちとせにフラグメント「ブラックアトラクション」を使用しました。

春のリオン祭り、開催中！（前書き）

ちとせ「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

鬼奇「どうしよう・・・・・・・、強く殴り過ぎた・・・・。」

リオン「気にするな。しょうがない。」

春のリオン祭り、開催中！

リオンＳｉｄｅ

僕は今、ヴェストリの広場と言う所でバカ二人の言い合いを聞いている。

「さぁ、頑張ってくださいリオンさん！そんな薔薇くわえた趣味悪キザ男なんてチョチョイとやってください！」

そう言って、僕の後方から声を上げているのがバカその１、ちとせ。

「ちょっとまて！何故彼と戦わなければならんのだね！？決闘を申し込んだのは君だろ！」

と、叫んでいるのがボクの前方にいる薔薇を持った金髪のバカその２、ギーシュ。

「この、か弱い美少女である私に戦えとはなんて無茶を言うんですか！ホント最低ですね。」

「だからと言って、他人に全てを丸投げは無いと思うのだが！？」

「あーもう！男のクセにグチグチと。貴方は黙って戦えばいいんです！」

会話から分かるとおり、僕はちとせの代理としてギーシュと決闘をしなければならなくなってしまった。頼まれた時はもちろん断ったが、何故かルイズの奴が頼みを聞き入れてしまった。それでも僕は

嫌だと拒否したが、「掃除手伝ってもらったんだから恩返ししなさい。」とニヤニヤしながら言い、周りの奴等も早く頷けという空気を出し始めてしまい、渋々了承したのだが・・・・・

「キサマ等、いい加減にしろ！始めるなら早くしないか！」

いざ決闘をしようとしたらギーシュとちとせが言い合いを始めてしまい僕はずっと二人の間でバカなやりとりを聞かされていた。はぁ、まったく。

「僕がこんなバカな事に付き合ってるというのに、貴様達はあーだこーだと無駄口ばかり。大題、貴様が出来もしない二股なぞかけるからこんな事になるんだ。こんな無駄な事をするぐらいなら彼女達を追っかけて謝ったほうが何倍も有意義だ。」

僕はそう言ってギーシュを睨みつける。

「うっ・・・なんだね！君も僕をバカにっ・・・」

「お前はあの娘達との関係が手遅れになってもいいのか？」

「そ、それは・・・・・・嫌だ。って、なに平民が貴族に説教なんかしてるんだ！もうとりあえず決闘開始だ！」

「はぁ～。」

バカに付ける薬は無い、か。僕は剣を抜き構える。すると、左手に違和感を感じ見てみるとルーンとやらが光っており、体も心なしか軽く感じる。不審に思っていたがギーシュが薔薇を振り花びらを落とすとそこから青銅の人形が現れたので僕は眼をを戻した。

「僕の二つ名は？青銅？青銅のギーシュだ。君の相手はこの青銅のゴーレム、？ワルキューレ？がお相手する。」

そう言ってギーシュはさらに薔薇を振り人形を7体まで増やす。そして、

「悪いが代理といえ手加減する気は無いんでね。すぐに終わらせてもらうよ。ワルキューレ！！」

ギーシュが号令を掛けると人形が僕に向かってくる。しかし、まったくなっていない。この程度。僕は先頭の人形にまずどの程度の硬さなのかを調べるために軽く斬り付けると、

シュイン！

と音と共に人形の体に簡単に切れ込みが入る。

「っ？・・・なんだ？今の手応え。」

違和感なんてレベルじゃないぐらいの妙な感覚。それに・・・体の事、動かした時に異様な軽さを感じた。そういえばルイズがルーンには様々な効果が付属される事があると言っていたな。これはそのせいか、

「これも色々試さないとな。」

僕は人形の攻撃をかわしながら考える。まずは・・・

「くっ、ちょこまかと。逃げてばかりでは無く戦え！」

「では、行かせて貰う。」

僕は身を屈め人形の懐に入り、

「双連撃(そうれんげき)！」

四つの斬撃を受けた人形はバラバラになり、さらに僕は他の人形に近づき、

「幻影刃(げんえいじん)！」

目の前の人形に突きを放ち胴体を貫いた後すり抜け、奥の人形を双剣で斬り払って破壊し、

「そこだ！」

幻影回帰(げんえいかいき)で勢いを殺さず振り返り、先ほど貫いた人形をもう一度突ら抜き完全に破壊する。なるほど、身体能力の向上に攻撃力の上昇か。しかし、これは体に無理な負担がかかりかねないな、上手くコントロール出来る様にしなければ。僕が考え事をしていると

「何やってるんですか！後４体なんですから早くやってしまってくださーい！」

ちとせが野次を飛ばしてきた。ホントうるさい奴だ。そういえば先ほどまでうるさかった周りの声が急に聞こえなくなったが・・・・・まぁいい。僕は構えをとり残りの人形を見据える。

ギーシュSide

なっ！？どうなってるんだ！たかが平民に僕のワルキューレがやられるなんて。

「くそっ！取り囲んで一気に倒せ！」

囲んでしまえばいくら強くとも、如何にも出来まい。僕はワルキューレに命じて奴を囲ませるが

「粉塵裂破衝（ふんじんれっぱしょう）！」

彼は地面を蹴って砂塵を巻き上げたと思ったら

ドゴンッ！

「な、なんだぁ！？」

彼を中心に爆発が起こりそして

「バ、バカな・・・！ワルキューレが・・・」

彼を囲んでいたワルキューレが全てバラバラになっており、彼はそれらの残骸を避けながら僕に近づいて、

「コレで終わりか？」

そう言い、僕に剣先を向けてきた。僕は7体までのワルキューレしか出せないので、

「まいった。僕の負けだ。」

素直に負けを認めた。実際、始めに3体のワルキューレを破壊されたのを見て僕は勝てないと解ってしまったので間単に言葉に出来た。ぞくに言うすがすがしい負けと言うやつなんだろう。僕はそう思いながら彼にお詫びの言葉を言おうとしたら・・・

「おーほほほ、やりました！私の勝ちですね。さぁ敗者は敗者らしく地面に頭をこすりつけこの私に媚び諂いなさい。」

そんな僕の心の内をぶち壊すような暴言を吐きながらやってきたのは本来の決闘相手の女性、確かチトセと言う名だったかな？彼女は周りの白い目線なんか気にせずさらに続ける。

「ほら、早くなさい。それとも負け犬らしく私の靴でも舐めますか？アーハハハハっがは！？」

僕はさすがに我慢できなくなり、怒鳴ろうと顔を彼女に向けたらその瞬間女性の声とは思えぬ声を出して倒れてしまった。そして、彼女が立っていた少し後ろの位置に太めの木の棒を持った男、確かミス・タバサが召喚した平民が立っており、

「コイツは悪い奴ではないんだ。ただ・・・少々頭が沸いてるだけだから。・・・その、気にするな。」

そう言って彼女を引きずって野次馬の中に戻っていってしまった。・・・僕としてはどうゆう反応を示せばいいか困るのだが・・・まあいい。僕は改めて彼、えっと・・・

「そういえば、君の名前を聞いてなかったね。僕はギーシュ・ド・グラモン　。ギーシュと呼んでくれ。」

「・・・リオンだ。リオン・マグナス」

「リオンか、わかった。その、今回の事はすまなかった。変な事に巻き込んでしまって。」

「ふん。確かにな。しかし僕もキッチリと断らなかったのも原因だからな。気にするな。」

僕はリオンに謝罪をする。しかし、彼はなんて偉そうなんだろう。

「えっと、その、厚かましいとは思うのだが僕と友人になってくれないか？」

「・・・・・・ふん、好きにしろ。」

「ああ！よろしくリオン！それじゃあ僕は怒らしてしまったレディ達に謝ってこなくてはいけないから、それじゃ。」

僕はリオンにそう言ってケティとモンモランシーに謝りに行くため女子寮に入っていった。

春のリオン祭り、開催中！（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、リオンの技を少し改良してますがご都合ってことで。
その2、描写されてませんが、この決闘は学園長達にちゃんと見られてます。

吸血鬼、それは・・・・・・・・人ン家の冷蔵庫を漁っていく隣人。（前書き）

ちとせ「ところで気になってたんですが、このサブタイトルなんですか？」

リオン「銀魂のサブタイトルをイメージしてつけてるらしいぞ（笑）」

鬼奇「・・・・・大月さん、元気かな～。」

吸血鬼、それは・・・・・・・人ン家の冷蔵庫を漁っていく隣人。

鬼奇Ｓｉｄｅ

はぁ～、決闘はつつがなく終わった。まあ、ちとせが最後にでしゃばったから一発かまして黙らしたけど・・・・・アレ大丈夫だよな？ギャクキャラだし大丈夫だと信じよう。おっと話しがズレた。で、俺があの決闘で心配なのはリオンがデルフリンガーを手に入れるかどうかだ。もしもの時は俺が買って何とかしよう。さて、俺は今タバサと一緒にシルフィードに乗って任務とやらに向かう途中だ。

「きゅい～♪シルフィード？シルフィード？私の新しいお名前なのね～♪きゅいきゅい。」

今回の任務はとある村に出現した吸血鬼を倒す事らしい。

「きゅい～、ねぇねぇ、お話ししようなのね。シルフィお話がしたいのね！」

そんで、正式な指令所とやらを貰うためにお城に行く事になった。

「もーう！！お兄様だんまりは無いのね！シルフィ寂しくて歌っちゃいそうなのね！」

ガンッ！！

と、タバサが持っていた大きな杖でシルフィードの頭を叩き

「うるさい。」

と一言文句を言う。

「きゅい～。痛いのね～。なにするのね、このチビ助！私はただお兄様とお喋りしようとしてただけなのに。」

ちなみにお兄様とは俺の事、シルフィードを仲間にした後色々と皆で話し合った結果、俺の事はお兄様、タバサの事はチビ助と言う様になった。しかし、

「この、私が大人しくしていればいい気になって～！誰のおかげでこうやって移動出来てるとおもってるのね！きゅい！」

こいつ結構うるさいな。ってかよくこんなに喋れるな・・・羨ましい。

「くぅ～何か言ってみるのねチビ助！」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・なんで何も喋んないのね！お兄様！このチビ助に言ってやるのね。この偉大なる風韻竜のシルフィが頑張って飛んでるのに優雅に本なんか読んじゃって。きゅい！」

シルフィよ、もういってる事がメチャメチャだぞ。このまま無視し続けるのもアレだな、タバサも俺の事ジッと見てきてるし。

「おい、シルフィ。」

「きゅい！お兄様やっとお喋りしてくれるのね。そうだ、お兄様さっきの決闘凄かったのねあの仮面の人がこう・・・剣でゴーレムを

スパパーンってバラバラにして・・・・・・」

「あ、うん、そうだな。」

とりあえず声を掛けたら勝手に喋り出した。相槌打って、テキトーに喋らしておこう。で、そんなこんなで、お城・・・プチ・トロワに着いたので俺は事前に決めていた通りに姿を消し、シルフィは使い魔として振舞う、もちろん韻竜であることは隠して。そして城の庭に着くと兵士が近づいてきて

「イザベラ様がお待ちです。」

そう言った。

「わかった。この子にご飯をあげて。」

タバサは兵士にそう言って返事も聞かず、スタスタと城の中に入っていった。俺はその後をついて行く。タバサには待ってるよう言われたけど・・・・イザベラを見てみたいという気持ちが強すぎてついね。さぁ、噂の性格捻くれ美少女デコ姫をご拝見。

「え？」

と、中に居た青い髪の少女が声を出し呆けた顔をしていた。たぶんこの娘がイザベラだろう、意外と可愛かった。イザベラはしばらくすると怒ったような表情になり、

「きちんと知らせたはずよね？今回の相手。」

と、訊ねてきてタバサは表情を変えずに頷く

「その相手の名前を言ってごらん？」

「吸血鬼」

イザベラが顔を引きつらせながらタバサにさらに問いかけてもタバサは淡々と言葉を言う。

「だったらわかるだろ？ピクニック気分で出発できる任務じゃないよ？」

イザベラが負けじとさらに嫌味な感じでタバサを小突きながら言うがもうタバサは何も言わず、イザベラを見つめ続けるだけ、イザベラは反応を見せないタバサを憎々しげに睨みつけるが、しばらくするとタバサの圧力に負けしたイザベラが苛立たしげに目的地などが記された書簡を投げ渡す。

「ふん、それが最後の任務にならなきゃいいね。せいぜい、無事を祈らせてもらうわ、シャルロット。」

イザベラは皮肉気にそう言って、タバサは無言のまま一礼して部屋を出て行った。俺は・・・

「はぁ、ホントに無事で・・・」

なんか面白そうな呟きを聞いたのでもうしばらくイザベラ観察。イザベラはさっきまでの気丈さなぞまったく無くなり、そのまま窓の方へ歩いて行く。

「へぇ、あれがあの子の使い魔か・・・私と違って才能あるあの子

にピッタシじゃない。」

アンニュイな感じで外のシルフィードを見ながら言う。

「今度は吸血鬼。お父様はシャルロットに何故こうまでして危険な任務を押付けるのかしら。」

イザベラは独り言を言いながらベットに倒れこみ、

「何も出来ない無能な私は祈る事しか出来ないけど・・・今度も無事に帰ってきてちょうだい。」

・・・・・うわ、つまんねぇ～、残って損した。俺は窓を開けてそこから飛び降りタバサより先にシルフィの所に戻る。

「・・・あれ？なんで窓が？」

上からイザベラの声が聞こえるが、知るか。チッ、つまんねぇもん見せやがって・・・・・・いかんいかん、ついあの頃みたいになってしまった。落ち着け俺。で、ちょいちょいっと場面は変わり

「サビエラ村、首都から５００リーグほど南東にある山間の村。アレだな。」

俺は飛んでいるシルフィの背から目を凝らして村を発見する。

「見えない。」

「まぁ、人間の視力じゃ無理な距離だからな。」

タバサも同じように見ようとしたらしいがまず無理だろう。まぁ俺も遮蔽物の無い空だがら見えてるんだけどな。

「降りて。」

「きゅい。」

タバサがシルフィに命じて村から少し離れた丘に着陸させる。

「で、俺が騎士のマネして、タバサとシルフィが従者のマネと」

ここに来るまでにタバサが色々と作戦を立てて説明してくれた通りに準備をする。まずシルフィを人間に化けさせる。

「え～、あの姿は動きにくいから嫌なのね。」

「化けて」「化けろ」

シルフィがわがままを言うのでタバサと俺が同時に言った。

「うっ、うう～、わかったのね・・・。ただし後でいっっっっっぽい、ご飯貰うんだから！」

俺達の威圧的な視線に観念して、シルフィは渋々承諾した。

「我をまといし風よ。我の姿を変えよ。」

シルフィがそう呪文を唱えると、しゅるしゅると風がシルフィの体にまとわりつき、青い渦となって包む。そして渦が消えると・・・・・・・・、同年代位のマッパの美少女がいた。

「・・・・・・（ニタリ）」

「・・・ッ！！」

ブゥン！ガンッ！！

シルフィを見てにやけたらタバサに顔面を杖で殴られた。その後も睨まれた上、さらに後ろを向かされた・・・チッ。

「・・・？何やってるのね？って、きゅい！？」

ブゥン！ドッ！

後ろでシルフィの悲鳴と大きな風斬り音と鈍い打撃音が聞こえる。なんか楽しそうだなぁ。俺がゆっくりと振り向こうとしたら

ガガガガッ！！

足元に氷の矢が刺さり

「振り向いちゃ、ダメ。」

冷たいタバサの声が背中に掛かった。・・・・・・・・・・くっ、せっかくのお色気イベントなのに。しばらくするとゴソゴソと服のこすれる音がして、

「もういい。」

「あー、もう！この服ごわごわしてやな感じなのね。きゅい。」

OKを貰ったので振り返るとそこには、服を着てしまっ・・・ゴホンッ。服を着たシルフィとマントを取ったタバサがいた。

「貴方も着替える。」

と、俺もヒラヒラ（？）した服とマントを渡されたのでしょうがなく着替える。・・・面倒臭いなぁこの服。・・・・・・で、騎士（俺）、従者×2（タバサ&シルフィ）の一行が村に入った。

吸血鬼、それは・・・・・・・・人ン家の冷蔵庫を漁っていく隣人。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、イザベラは人前では悪女、一人の時はヘタレのタイプです。
その2、鬼奇は中高の時グレてました。

一日調査したぐらいで吸血鬼の正体がわかったら、九人も犠牲者は出てないと思

鬼奇「村人を片っ端から斬りつけて、傷の治り具合を見て判断すればいいんじゃね？」

ちとせ「なるほど！傷の治りが早い人が吸血鬼ですもんね。ナイスアイディアです！」

リオン「そんなわけあるか！」

一日調査したぐらいで吸血鬼の正体がわかったら、九人も犠牲者は出てないと思

タバサSide

私達はそれぞれ変装をし、ザビエラ村に入る。私とシルフィードはキキの後ろに荷物を持ってついて行くと、

「今度の騎士様は大丈夫か？」「女子供を連れてくるなんて」「前に来た騎士も偉そうにしてたけどすぐ殺されちゃったのに」

遠巻きに見ている村人がひそひそと私達の陰口を言う。キキは周りを軽く見渡して、

「何見てんだ・・・屑共！」

恫喝する様な声色で村人達に叫ぶ。

「ひっ、なんだあの騎士は・・・」「最悪じゃ」「はぁ、もう騎士なんて当てにできねぇ」「俺等で吸血鬼を倒すしかない」

キキの態度に村人達はさらに不信感を募らせて白い眼で私達を見ながらヒソヒソ話しを続ける。

「う～～もう！なんなのねあいつ等！お兄様を悪く言うなんて。ほらチビ助もなんか言ってやるのね」

シルフィードが村人の態度に文句を言う続けながらしばらく歩くと村の奥にある段々畑の一番高い所に建った村長の家に着くと、

「村人の態度が悪い。気分を害したから頭を床に擦り付けて謝れ」
村長に会うなりキキはそう言った。
「は？そ、それはその・・・なんていいましょうか・・・・」
「ハッ！この俺がこんな辺鄙な村まで着てやったてのにひでー村だよな。こんな小さな村、無くなったって誰も困りゃしねーよな。・・・・・・帰るか」
「そ、そんな！お願いします騎士様！この村を吸血鬼から救ってください」
「あ〝ー？だったら、それ相応の態度ってのがあるたろ？平民」
・・・・・・・・・・・キキには無能なメイジを演じるように頼んだが、これではただの悪人にしか見えない。確かにこうゆう態度をとるメイジがいる事は否定しないが。村長はキキの前で膝をつき頭を床につけて
「ど、どうか・・・お願いします」
「ハッ！しょーがねぇ。この蒼炎のカイト様が吸血鬼を焼き殺してやる。感謝しろよ平民」
蒼炎のカイトとはキキの偽名だ、なんでも昔キキが好きだった物語の人物の名前らしい。しかしキキが活き活きしてるのは私の気のせいだろうか？
「きゅ、きゅい～。お兄様・・・怖いのね」

シルフィードが顔を青くしながら小声で呟く。その後キキは村長から吸血鬼についての詳しい情報を聞いたがそれは報告書とたいして変わりなく、二ヶ月に少女が犠牲になったのを皮切りにもう九人の犠牲者が出ているのこと。

「二人ほど犠牲者が出たあと、夜出歩く村人はいなくなったんですじゃ。でも・・・・・」

村長がそのあとも村で起きた事を話してくれた。キキは黙ってずっと話を聞き、シルフィードはさらに顔を青くしてガタガタと震え

「こ、怖いのね～」

と、言いながら私にしがみついてきた。

「そうです。しかし、一番怖いのは吸血鬼が操る屍人鬼（グール）の存在ですのじゃ」

村長は悲しそうな顔でそう言った。屍人鬼（グール）、それは吸血鬼が操る死体のことだ。吸血鬼自体はあまり強くは無いが屍人鬼（グール）違う、その力は人間のそれを大きく超え、しかも死んでいるからいくら攻撃を加えても怯むことなく相手に襲い掛かるためメイジには天敵である。

「村人達も互いに屍人鬼（グール）じゃないのかと疑い始めてしまい、村を捨てる者もおりますのじゃ」

村長は話してる内に悲しくなってきたのか表情が暗くなっていってしまった。すると、

「屍人鬼（グール）には、吸血鬼に血を吸われた傷があるはずだわ」

シルフィードがそう言い、皆の視線を集める。村長はそれを聞いてさらに話しを進める。

「私等も調べたんですが、なにせこんな田舎ですから仕事中に虫や蛭に刺される者が多くて・・・。首に傷がある者だけでも、七人ほどおりましたわい」

と、だから吸血鬼につけられたかどうかは分からないと村長は言った。キキは話は終わったとばかりに椅子から立ち上がり、

「話は分かった。それじゃあ疲れたから俺は夜まで寝る。」

「へっ？吸血鬼退治は！？」

「あ゛？吸血鬼ってのは夜活動するもんだろ、こんな昼間っから探したって見つかるかよ。分かったら部屋に案内しろ。」

キキはそう言って村長に案内をさせる。私達もキキの後について行こうとすると、

「・・・？なんだあのガキは？」

「・・・ッ！！」

キキがそう言って廊下の奥を見るとそこには１０歳ぐらいの女の子がいたが、キキと目が合うと逃げてしまった。

「すいません騎士様。あの子はその・・・メイジを怖がっておりま

して・・・」

「ハッ！ガキ一人に嫌われたところでなんとも思わねぇから安心しろ。」

そして私達は村長に部屋に案内されて

「では、何かありましたらお声をおかけください。」

そう言って村長はリビングの方に戻っていった。部屋に入った私達はそれぞれ荷物を置いて、

「・・・やりすぎ。」

「違う。これはその、なんだ。……違うんだ」

「きゅい。お兄様怖かったのね」

まぁ、キキはそのまま演技を続けてもらって、これからの事を話す。

「キキはここで待機、私とシルフィードで村を調査して来る」

「おう」

「えっ、私も行くのね？！」

そう言ったシルフィードに私とキキが呆れたような視線を浴びせると、

「うっ・・・行きますなのね」

怯みながら答えた。そして、私達は村に調査をしに向かった。まず犠牲者が出た家を回り状況を確認した。どの家でも出入り口を全て塞いでいるのに侵入され、寝ずの番をしているのにいつの間にか眠ってしまうとの事。

「眠りの先住魔法なのね」

と、話しを聞いたシルフィードは言った。空気があればどこでも唱えることが可能なその先住魔法で家人を眠らせ、犠牲者の血を吸うみたいだ。私とシルフィードは家の中を調べる。

「きゅい～。ん？チビ助どこ行ったのね？」

しばらくしてシルフィードが私の事を呼んだので、私は煙突の中から出て姿を現す。

「きゅいっ！チビ助！なんてとこ入ってるのね！？そんな所調べたって何も出るわけないじゃない」

と、そんなふうに村を回っていると

「出てこい！吸血鬼！」

手に鍬や鎌、火のついた松明などを持って村人達が村はずれのあばら家を取り囲み口々にわめいていた。

「あらチビ助！吸血鬼ですって！きゅい！」

シルフィードが震えながら抱きついてきた。鬱陶しかったがとりあ

えずほっといて、私は村人の様子を見ていると、あばら家の中から年のころ四十前ほどの屈強な大男が出てきて

「誰が吸血鬼だ！失礼なことを言うんじゃねえ！」

村人達に大声で怒鳴った。しかし、村人達は臆する様子も無く

「アレキサンドル！お前達が一番怪しいんだよ！よそ者が！ほら吸血鬼をだせ！」

と叫び、アレキサンドルと呼ばれた大男も負けじと

「吸血鬼なんかいねえよ！」

と叫び返した。その後もアレキサンドルと村人の言い合は続き、ついには強硬手段であばら家に村人が押し入ろうとしたその時、

「やめるのねー！争いはいけないのね！」

シルフィードが叫びながら騒動の中に飛び込んで行ってしまった。まったく、なにをやってんだか。もちろん急に現れたシルフィードに村人達は、

「なんだお前！邪魔すんじゃねえ！」

「きゅいっ！」

おもいっきり怒鳴られた。シルフィードは身を竦めて私に助けを求めるように見てきた。はぁ、しょうがない。私はシルフィードの所まで行き

「私達は騎士さまに吸血鬼の調査を命じられた従者です」
私は村人達に言う。すると、村人の一人が
「確かにこいつ等、あのメイジと一緒にいた二人だ」
と言い、それを聞いた他の村人は怪訝な顔をしながら一時的に大人しくなった。が、
「で、肝心の騎士は一体どこにいるんだ？」
村人はキキがいない事を不審に思い聞いてきた。
「騎士さまは夜の警備のため今は休んでいます。なので私達が騎士さの代わりに調査をしています」
私はもっともらしい理由を説明すると、
「おいおい！こんな女子供に調査させるなんて、ふざけてるのか！」
と村人達はまた騒ぎ始めると、
「こらこら！お前たち！騒ぎを聞いて来てみれば！証拠も無いのに誰かを屍人鬼（グール）と決め付けるなんて。」
村長が現れて、村人たちを大人しくさせた。その後、村人と村長がしばらく言い合いをし
「とにかく！調査に来たんなら、そいつ等を調べてくれよ！アレキ

サンドルもやましい事がないなら大丈夫だろ。」

という事になり、私と村長、村で薬草師をしているレオンと言う青年で家の中のお婆さんを調べる事になった。もちろんアレキサンドルの事も調べて首に傷は在ったものの、さすがにあの程度の傷で屍人(グール)鬼かどうかは解らなかった。そして、お婆さんも調べたがやはりコレといった証拠も無く。村長はその事を村人達に伝えて、村人達も渋々ながら納得しあばら家から離れていった。私達も一旦キキに報告をしに村長の家に戻った。

一日調査したぐらいで吸血鬼の正体がわかったら、九人も犠牲者は出てないと思

どうでもいい補足情報

その1、鬼奇は悪人ではありません。立派な善人です。

今出来る事はすぐにやったほうがいいいよ。（前書き）

ジン「やっと見つけた！前書きの部屋」

ちとせ「ああ、ついに見つかってしまいましたか」

鬼奇「じゃあ、俺等は退散だな」

リオン「そうだな。後は任せたぞ、ちとせ」

ちとせ「はい、それではお二方、今までありがとうございました。たまには顔を出してくださいね」

ジン「えっ？何っ？」

今出来る事はすぐにやったほうがいいよ。

鬼奇Ｓｉｄｅ

「あーあ、何で俺がこんな田舎でこんなメンドクセェことしなきゃならねぇんだっての」

俺は今、村長の屋敷の庭で酒を飲んで酔ってるフリをしている。何故こんなことをしているかと言うと、調査から戻ってきたタバサから囮作戦を提案されたからだ。タバサ曰く、調査の成果は無し。で、一旦この屋敷に村の若い娘を集めて、保護するのと同時に俺を囮にして吸血鬼をおびき出す、とのこと。ちなみにタバサは庭の隅にある納屋に身を隠している。

「ん～、あーそうだ。おいジジィ」

俺は酒を運んできた村長に声をかける。

「は、はい。なんでしょう、騎士様」

「あのガキ、なんでメイジを怖がってんだ？」

「も、申し訳ありません。あの子は両親をメイジに殺されておりまして・・・。それで」

俺が幼女のことを聞くと、村長はそう教えてくれた。

「ふーん。」

俺はテキトーに返事をし、また酒を飲み始める。で、そんなこんなで夜も更けてきて、二つの月が高く上がり辺りを妖しく照らし始めた頃

「・・・きぃやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

屋敷からか細い悲鳴が聞こえてきた。タバサはすぐさま茂みから出て悲鳴が聞こえた部屋に飛び込んでいった。俺はのんびり歩いていった。だって急ぐ必要ないし。

「はいはい、どうしたー？ゴキブリでも現れたかー？」

俺は割れている窓から顔を出し、中に居る幼女とタバサに訊ねる。が、幼女はがたがた震えて答えないし、タバサも幼女を慰めて答えない。村長とシルフィは動揺していて答えられそうになかった。その後、集めた村娘達が騒ぎ出しシルフィと村長がそれを納め、タバサは幼女をリビングに連れて行った。

「・・・・・お、男の人がいきなり入ってきて。わたしの身体をつかもうとしたの」

始めは脅えていて震えていただけだったが、温めたスープをタバサが飲まして落ち着かせ、事情を聞けるようになったのでタバサが幼女の話を聞いている。俺は近づくと脅えられるから離れた所で二人の様子を見ている。

「寝てたら・・・、耳のそばで荒い息がしたの。わたし、びっくりして叫んだの」

幼女はタバサに抱きつき震えながら襲われた時のことを説明してい

く。

「口から・・・、口から牙が生えてて・・・、だらだら涎が垂れてきて・・・・・・。ひっぐ、うっぐ、えぐ・・・・」

喋ってるうちに泣き出してしまった幼女をタバサは頭を撫でながら優しい声で

「もう大丈夫。その人は見覚えのある人だった？」

と言った。まぁ、聞きたい事は聞けたし、俺は

「俺は周辺を見回ってくるから、そのガキのことは任せた。」

そう言って屋敷を出た。さーてと、準備準備っと

「しかし、この世界の妖怪、わかりやすいなぁ。見ただけで人間じゃないって分かったもんな。さて、どうしてやろうかなぁ～？」

俺は考えながらとりあえず色々と準備をする。まずバレない様に明鏡止水で姿を消して、屋敷の周りに認識阻害の符を貼って中の人達に気づかれないようにする。後は畏を発動したまま屋敷に戻りタバサと幼女を監視する。

「ごめんねぇ～。タバサ。」

俺は部屋に幼女と一緒に部屋に入っていくタバサの後を追い部屋に侵入する。

「一緒に寝ていい？」

「いい」

幼女がタバサと一緒にベットに入ろうとしたが、そうはさせません。だってこれから幼女吸血鬼とO・HA・NA・SIするから。ほい、ペタッとな。俺は睡眠効果の符をタバサのおでこに貼り付けた。ついでにとなりのベットで寝てるシルフィにも。

「へ？」

幼女は突如現れた符とタバサが急に眠ってしまったことに呆けた顔した。で、俺は

ガッ！

「あ〝っ！・・・ぐっ、・・・・ううっ」

幼女の首をわしづかみにして持ち上げる

「よう、吸血鬼。」

俺がそう言うと幼女は目を見開き驚いた表情になり、すぐさま

「誰かっ！助け・・・」

大声出してさらに近くにあった家具を蹴ったりして大きな音を出すが

「ん〜、残念。そんなことしても屋敷の中に居る人には気づかれないのよね。」

「くっ・・・」

俺がそう言ったら幼女は悔しそうな顔をした。

「なぁ、ちょっと森に散歩に・・・」

ガチャッ

俺は話しながら窓を開け

「行こうか！！」

ブゥンッ！

「なっ！あああぁぁぁあああぁぁぁっぁぁぁあ！！！」

幼女を思い切り森の方に投げ飛ばした。俺もすぐに部屋を出て森の方に跳んで行く。途中幼女を大男らしき影が受け止めて森に入っていたが気にせず俺も森に入る。

「さてと・・・、あっちだな。」

森に入った後、耳を澄ませ足音を探る。歩幅の小さい足音は幼女の方は離れていっている。歩幅の大きい足音の大男の方は迂回しながら俺の背後に回ってきている。

「大男の方はなんとでもなるから幼女を追うか。」

と言う感じで、足音を頼りに幼女を追い、木々が開けた場所で追いついた。

「よっ、投げ飛ばした張本人が言うのはアレだけど大丈夫か？」

「ホントそうね。で、あなた一体何者なの？」

俺が話しかけると幼女も返してきた。それと後方からの気配接近中ってな。

「ははは、そうだな。それじゃあ自己紹介。俺の本当の名前は鬼奇だ。」

「へぇー、カイトって偽名だったんだね。わたしはエルザってゆうの。よろしくね、キキお兄ちゃん。そして・・・・・・、さようなら。」

俺が名前を教えると、幼女・・・エルザも名前を教えてくれた。そして、それと同時に後ろから大男が襲い掛かってきた。さらに、

「枝よ。伸びし森の枝よ。彼の身体を拘束したまえ。」

エルザが呪文らしきものを唱えると、周りから枝が俺に向かって伸びてきた。エルザを見ると無邪気な笑顔を俺に向けており、さながら欲しかった玩具を手に入れたような感じだった。

「・・・・・はぁ。」

俺は軽いため息をついて、あたり一帯を青い炎で包んだ。

「・・・っ！！な、なにっ！？」

エルザが悲鳴じみた声を上げ動揺する。俺に襲い掛かってきた大男と枝は青い炎で焼き炭にする。それを見たエルザは目を見開き、恐

怖で顔を引きつらせながら後退りしていく。俺が近づいて行くと、エルザはどんどん後ろに下がっていき、そして・・・トンッと背に木が当たる。

「・・・ッ！？」

エルザは後ろを向き、木で行き止まりになっているのに気づき逃げ場を探そうと周りを見るが炎で左右を囲まれおり逃げ場など無く、さらに近づいてくる俺を見て恐怖により足が竦みその場に座り込んでしまった。俺はエルザの頭に手を乗せるとエルザはビクリと身体を震わせ俺を見上げてきた。

「ん～、どうしようかな？君のことを処分しないとタバサに迷惑かかるし」

「・・・ひっ！」

俺が呟いた処分と言う言葉にエルザはさらに恐怖で震えだし、涙を溜めながら小さな悲鳴を上げた。

「でも、同類のよしみで助けてあげたいってのもあるんだよなぁ。」

俺がそう言うとエルザは

「・・・！た、助けて・・・おね・・・がい。」

と、震えながら呟いてきた。さらに

「もう、もうこの村では人を襲わないし！すぐにでも出て行くから！お願い、見逃して！」

涙を流し震えながらもそう懇願してきた。・・・・やべっ、なんかグッとくる。

「あ、そういえばお前。両親をメイジに殺されてるって聞いたが・・・・・本当か？」

「・・・っ！？・・・うん。」

俺は村長に聞いたことを思い出し、エルザに聞くと、驚いた顔をして頷いた。

「元々私は、両親と一緒に森の奥で暮らしていたの。吸血鬼だから月に何回かは近隣の村に食事しには行ったけど、でも殺さないように必要最低限の量しか血を吸わない様にもしてた。お母さんに編み物を教えて貰ったり、お父さんはよく遊んでくれた。代わり映えはしなかったけどとても幸せだった。そんなある日、いきなりメイジが襲ってきたの。『森に住む化け物を退治に来た』って。それで・・・お父さんは私とお母さんを逃がすために囮になってメイジ達の相手をして、お母さんも追ってきた奴等に・・・・。私は何とか逃げて・・・・その後は村や寺院を回って今まで生きてきたの。始めは夜人間達が寝てる間に少しだけ血を吸わせて貰ってたのだけど・・・私が吸血鬼だってバレると、化け物と言って私を殺しにくるの。どこに行っても、だから・・・」

エルザはそのように一通り話すとまた俯いてしまった。俺はエルザに手を載せたまま

「・・・長いな～。それと、俺はそうゆうお涙頂戴は好きくない」

そう言って、エルザを青い炎で包んだ。

「へ！あああ！いやあぁぁぁぁぁ！！助けて！助けて！嫌だ嫌だ！死にたくない！いやぁぁっぁぁ！！！！」

エルザは炎に包まれると泣き叫びながら暴れ始めたが、俺が手を載せて押さえつけているため殆ど動けずに泣き続ける。

「あ〝っあ〝・・・だ、ずけて・・・いやだ、うっぐ」

あー、マジぱねぇっす。美幼女の・・・・・って、俺なにやってんだ！？ガンバレ俺の理性！欲望に負けるな！・・・・・・・・よし、大丈夫。俺は変態じゃない！

「うっぐ・・・えっぐ。・・・？ふぇ、ふぁ？」

俺が色々と考え込んでいたら、エルザがやっと異変に気づいた。

「ふぇ？え？・・・何？・・・・え、熱くない？なんで・・・服も」

炎に包まれてるエルザには火傷どころか服にも焦げ跡一つ無い。エルザは驚いた表情で、自分の身体と俺のニタついた顔を交互に見て、そして

「・・・・っ！？な、何なのこれ！！」

「いやいやいや、中々可愛いもの見れたよ。あはははは」

エルザが叫んだ。俺は笑いながら炎を消して、ぐしゃぐしゃのエルザの顔を拭いてやりながら色々説明してやる。

「簡単に言うとな、今の青い炎は俺の意志で自由に操作出来るんだ。さっきみたいに炎を任意の場所に点けたりとか、燃やすとか燃やさないとかな。大男は燃えたけど、お前は燃えなかっただろ」

エルザは俺の説明を聞きながら大男だった物を見る。

「で、俺は平和主義者だからな、エルザがそこまでの悪者じゃなかったら何とかしてやろうかなっと思ったわけよ」

「平和主義者は幼い子供を投げ飛ばしたりはしないと思う」

俺がどれほどの人格者かを教えているとエルザがボソッと文句を言ってきた。まったく、

「燃やしちゃうぞ」

「ひっ」

俺が優しい笑顔で手に炎を出しながら頭を撫でてやったらエルザはビクリと身体を硬直させた。

「さて、冗談もそこそこにして、この後はどうするかな？とりあえずタバサと相談しないといけないけど、まずは・・・・吸血鬼の事をどう村人に説明するか。・・・・・ん～、とりあえず」

俺は大男を完全に消し炭にして、その横に小柄な人型の焼け跡を作る。

「よし、これでテキトーにでっち上げればいいか。よし、帰るぞエ

ルザ」

「へっ？あっ」

俺はエルザの手を引いて村に帰った。

今出来る事はすぐにやったほうがいいよ。（後書き）

どうでもいい補足情報
その1、鬼奇は変態ではありません。良識と常識を持った、善良なる一般庶民です。
その2、前書きの部屋がちとせの部屋に進化しました。

村人ざまぁｗｗｗｗ（前書き）

烏丸ちとせ（以後ち）「どうも、皆さんこんにちは。ワタクシ、ちとせの部屋の主、烏丸ちとせです。で、こちらがちとせの部屋会員Ｎｏ．０１のジンあんとかなんとかアルベルトさんことジンさんです。拍手～」

ジン（以後ジ）「ジン・アークレイン・ロ・ランタ・グシセイア・キ・アルベルトだ！！テキトーな名前で呼ぶなよ！ってかなんだよこの部屋！？」

ち「はい。では説明します。この部屋はですね、この物語の都合上必要だったり、なんとなく思いつきで出したものの、話が進む上で邪魔だったり、もう必要無くなったりして、この物語の出番が無くなったキャラたちが駄弁る場所です」

ジ「ちょっと待て！つまり俺はもう出番がないと！？俺、チート転生者だぞ！」

ち「はい。ジンさんの場合、本来は私を召喚するためのだけのキャラだったので、その設定は作者の思いつきであり、意味はありません。残念ですね」

ジ「えええええええええええええええ！！！！！」

ち「安心してください。そのうち他キャラも増えていくので、ここも賑やかになりますよ」

ジ「いやいやいや！賑やかになるとかそーゆうのじゃなくて！」

ち「では皆さん、今回はこのへんで。次回もよろしくお願いします」

ジ「えっ？俺の疑問は無視！？」

村人ざまぁｗｗｗｗ

鬼奇Ｓｉｄｅ

「さて、戻ってきてみれば、家を放火して騒いでいる村人達を見て感想をどうぞ」

「人間は不思議な事するね」

俺がエルザに話かけると、そう返ってきた。俺達は森から村に帰ってくると、なんだか騒がしかったのでそちらに向かうと村人たちがあばら家に火をつけていた。

「あ！あんたは」

俺達が様子を見ていると村人たちが気づき話しかけてきた。

「なんだ、ぐうたら騎士様じゃないか。こんなところでなにをしてるんだ」

「お前等こそ、なにやってるんだ？」

村人の一人が嫌味を言ってきたが、俺は気にせずに質問をした。

「見て分かるだろ、吸血鬼退治さ」

「・・・・・・へぇ～。吸血鬼退治ね。つーことは、中に人が居るってことか」

俺は得意げにニヤついた村人の返答を聞き、さらに質問する

「当たり前だろ！ここのババァ占い師なんて嘘つきやがって」「そうだそうだ。アレキサンドルの野郎、やっぱり屍人鬼（グール）だったんだ。」「俺も見たぞ。あいつがとんでもねぇ形相で動き回ってたのを」「俺も見た！ありゃ人間の動きじゃねえ」

一人の村人が答えたら、周りにいた奴等も口々に言いはじめた。俺はそれを聞いてエルザを見る。

「こ、怖いね」

エルザは俺から顔を背けどもり気味に言った。まったく、この子は・・・・。

「おや？エルザちゃん？こんな夜更けに、しかも騎士様と一緒なんて・・・・。どうしたんだ？」

村人はエルザが居る事にやっと気づき、声をかけたので

「ああ、さっき屍人鬼（グール）に攫われたから助けてきた。ついでに森の奥に住み着いてた“本物”の吸血鬼も退治してきた」

俺がそう答えると、村人たちはそろって驚愕し、戸惑い、そして顔を青くし始めた。村人がパニックになってるうちにガラガラガシャン！と、あばら家が炎に包まれて崩れ落ちた。

「・・・・っ！火を消せー！！」「は、早くしろ！」「み、水！水を！！」

村人たちはあばら家が崩れる音でやっとこさ火を消し始めたが、

「もう死んでんだろ、これ」

「元々病気で弱ってたから、煙が充満した時点で手遅れね」

時すでに遅し。俺達は必死な顔で火を消しにかかっている村人たちを見てそんなことを言い合った。

「さて、帰って寝るか」

「なっ！ちょっ、待ってくれ！騎士様の魔法でこの火を消してくれ！」

俺が村長の屋敷に帰ろうとしたら、腕を捉まれそんなことを言われたので

「は？何で？俺は吸血鬼の退治を依頼されたのであり、依頼を終えた以上お前等のために魔法を使う気はねえ。」

俺はそう言い切り捨てて、腕を振りほどきエルザと屋敷に戻った。

タバサＳｉｄｅ

「ん・・・」

私は朝日の光で目を覚ました。・・・・・えっ？おかしい、私は確

か怖がっているエルザを安心させるために一緒に部屋に入って、そして・・・・
ピラッ
「これは・・・？」
私は眠ってしまう前の事を思い出そうとしていたら額に紙が張り付いている事に気づいた。それを取りよく見ると、キキが持っているフダというものだった。・・・・・・・・・・・・話を聞く必要があるようだ。
「うま～、お肉。お肉なのね～。」
隣からシルフィードの声が聞こえてきたのでそちらを向くと私と同じように額にフダが張り付いていた。こいつは・・・・。私はベットから降りて、何故か立てかけてあった私の杖を取り、そして・・・・
ガンッ！
「ぎゅっ！」
シルフィードに振り下ろし、部屋を出て行った。
「きゅい～、な、なんなのね～。」
部屋からうるさい声が聞こえてきたが、そんなことはどうでもよくて、今優先すべき事は・・・・
「キキと話す事。」
私は杖を握り締めて、キキが寝ている部屋に行く。私は気配を消し、

音を立てないように慎重に部屋に入り、眠っているキキに近づく。

「・・・ん？」

キキの掛けている布団が不自然に膨らんでいる。私は手を伸ばし布団を捲ると、

「ん～、うゆ～～。」

エルザがキキに引っ付いて寝ていた。確かエルザはキキを怖がっていたはずなのに、一体何が？

「ん～、ふぁえ・・・。ん？あ～お姉ちゃん・・・おはよ～」

私が動揺して考え込んでいたら、エルザが目覚めた。

「・・・・おはよう。なんで騎士様と寝ていたの？」

私はエルザに質問をした。そしたら

「ん～、だって私、キキお兄ちゃんの妹になるから～」

とんでもないことを言いやがった。そう、これはなにがなんでも絶対に完璧にキッチリと話をしなければならないようだ。

「エルザ。あなたにも聞きたい事はあるけど・・・・、今は彼と話しをしなければならないから」

「う、うん。私・・・ご、ご飯食べに行くね。」

私は優しく声をかけてエルザを部屋から追い出す。エルザは引きつった表情して走って出て行った。さて

「ラナ・デル・ウィンデ」

ドゴォンッ！！！

「おぐぅっ！」

私はエア・ハンマーをキキに叩きつける。キキはきりもみしながら吹っ飛び、壁にぶつかった。

「ラグーズ・ウォータル・イふぅっ」

「チョイ待て！」

私がウィンディ・アイシクルを放とうとしたら口を塞がれ邪魔された。

「眠ってるときはさすがにシャレにならい」

キキは私の口と杖を持った法の腕を押さえながら、引きつった表情で言ってきたが、そんなことどうでもいい。

「説明」

私は、何故私の額にフダが張ってあったのか、何故エルザと寝ていたのか、何故エルザがキキの名を知っていたのかと、とにかく説明をしてもらいたい。

「えっと・・・・それは昨晩のことか？」

「すべて」

やはりキキが何がやったのか。

「あ～、そうだな。それじゃあ俺がタバサを眠らせた辺りから話すとだな・・・・」

キキは私が寝ている間のことを説明してくれた。

「・・・・で、エルザを村に置いとくわけにはいかないから、テキトーな理由をつけて連れて行こうかなって・・・・・・うん、しょうがないことだった」

キキの説明を聞き終えたが、何というか

「無茶苦茶」

「ははは・・・・」

私が呟くと、キキは顔を背けた。しかし、説得しただけでそんなにアッサリとゆうことを聞くものだろうか？屍人鬼（グール）もそうだ、キキは強いのは分かるが、吸血鬼と一緒に攻撃を仕掛けられて簡単に倒せるなんて・・・・。今思えば私はキキの事を東方の亜人と言う事しか知らない。

「ん？どうした？」

キキの顔をジッと見ていたら声を掛けられたので私は

「後で、また「ぐぅ〜」・・・・」

「・・・・・とりあえず飯食いにいこうか」

間が悪いことにお腹が鳴ってしまった。キキは苦笑しながらそう言って私の背中を押しながら部屋を出た。リビングに着き、朝食を食べていると

「おい、ジジィ。そのガキ俺の屋敷のメイドにするから、報酬の代わりに連れてかせてもらうぞ」

キキが突如そんなことを言い、村長は目を見開いて驚き

「そ、そんな！お願いします！お金ならいくらでも払いますから、エルザを連れて行くのはご勘弁を！」

そう言って、エルザを後ろに庇い、キキに頭を下げて懇願してきた。

「ハッ、もう決めたことだ。それに村の連中には色々な陰口を貰ったからな。それの礼もかねてギキは貰っていく。」

「そ、そんな」

キキは村長の懇願を一蹴して食事を開始した。そして・・・

「エルザ、元気でやるんだよ」

「うん、おじいちゃん。今までありがとう、おじいちゃんも元気でね」

荷物をまとめて、私たちは村の外れにいる。村長はエルザと別れを惜しみ、悲しい表情でエルザを抱擁している。しかし、村長と数人の子供達しか見送りに来ないのは、キキに聞いたとおり昨夜、勘違いで例のお婆さんを殺してしまったことに、まいってしまってるのだろう。

「それじゃあ、いくぞ」

エルザが別れを終えて、こちらに来たのを見計らってキキはそう言い、私たちは村から出て行った。

「あ～、疲れた」

キキはそう言いながら身体を伸ばして寝転がった。私たちは元の姿に戻ったシルフィードで帰ってる途中だ。私は座って本を読んでおり、エルザは下を見てはしゃいでいた。

「キキ、エルザの事、どうするの？」

「ん？あー、それなら考えがあるから大丈夫」

キキにエルザのことを聞くとそう返ってきたが、少し心配だ。

「ねえ、お兄ちゃん。昨日は色々あって聞けなかったけど、お兄ちゃんって一体何者なの？アノ青い炎も私たちが使う精霊の力とは違ったし」

青い炎？何だそれは？

「きゅい。お兄様は姿を消したりする以外にもそんなこともできたのね？」

姿を消す・・・、それなら私も何度か見たことがある。やはりちゃんとにキキのことを聞いたほうがいい様だ。

「キキ。私もあなたのことちゃんと聞きたい」

「あ～・・・・、ん～。タバサにはそのうち話そうかなと思ってたし、帰ったら話すよ」

キキはそう言ったら寝始めてしまった。なんというか・・・モヤモヤした感じを残して私たちは学院まで帰った。

村人ざまぁｗｗｗｗ（後書き）

どうでもいい補足情報

その１、エルザの年齢を５歳から１０歳に変更しました。

日常編を書いてみたら、やっぱり変になった。（前書き）

ち「こんにちは、烏丸ちとせです」

ジ「・・・・・・・ジンです」

ち「さて、今回の本編は日常編をお見せするんですが・・・・、酷い内容ですね～」

ジ「確かに。なんせ俺が出演して・・」

ち「ジンさんはしばらく出ませんので、そういうボケは止めて下さい」

ジ「ボケじゃねーよ！大真面目だよ！」

ち「はいはい、そうですね。・・・・・・・うーん、やっぱり二人だけだと盛り上がりませんね」

ジ「まぁ、そうだろうな。で、どうすんだ？この変な状況」

ち「・・・・・てきとうに補足情報ながしますか。えっと、あー、エルザちゃんに関することがありますね」

ジ「そんじゃあ俺が説明するぞ。タバサたちが学院に帰って来た後、鬼奇がバイクを手土産にコルベール先生にエルザを学院の使用人として働けるようにして欲しいと頼みに行ったら、二つ返事で了承してくれた。と、言う事だが・・・、これって」

ち「賄賂ですね。教師が賄賂受け取ってゆうこと聞いちゃってますね」

ジ「・・・・・・まぁ、学院長ですら簡単に怪盗を学院内に入れちゃってるからな」

ち「それでは、学院が相当なダメ学校が再確認出来たところで、今回はこの辺で、皆さん、さようなら」

ジ「じゃーなー」

日常編を書いてみたら、やっぱり変になった。

リオンＳｉｄｅ

「おい、ルイズ。朝だぞ」

僕がこの世界に来て数日ほどが経った。

「う、ん～。あ、おはようリオン」

「寝ぼけてないで、早く起きろ」

今は現在、僕はルイズの使い魔というよりはお世話係のようなことをしている。ルイズ曰く『せっかく人間の使い魔なんだから別に構わないでしょ』とのこと。はぁ、まったく。

「分かってるわよ。ほら、服とって」

「そこに置いてあるだろ。僕は先に行ってるぞ」

「うん、じゃあ後でね」

僕は部屋を出て、朝食を食べに厨房に行く。

「あ、おはよう。リオンお兄ちゃん。今ご飯用意するから」

「ああ、たのむ。エルザ」

僕が厨房へ入ると、ちとせとキキがおり、朝食の準備をしていたエ

ルザが僕を見るとそう言って奥に入っていった。

「ホント、エルザちゃんは可愛くて働き者ですね～」

「だな～。連れてきたときは、あんなにちゃんと働くとは思わなかった」

ちとせとキキがエルザの後姿を見ながら、しみじみと呟いた。エルザはキキがどこからか連れてきた１０歳ぐらいの少女で、学園のメイドとして働かしてもらっているらしい。

その後、朝食を取り終えると

「じゃあ、今日もひとつお手合わせを」

「ああ、そうだな」

ここ最近やり始めた剣の訓練をするため、キキはそう言って剣を抜く。キキの剣は大体６０センチ程度の細身の片刃で、間合いは小さいがその分小回りが利くので中々厄介だ。僕も剣を構えて互いに隙を探しあう。そして

「ふっ！」

「はぁっ！」

同じタイミングで互いに接近しあい、切り結ぶ。僕は左に持ったダガーでキキの体勢を崩しにかかるがキキはタイミングを合わせてバックステップをし、さらにそこからすぐに接近してきて剣を振るう。僕はそれを剣で受け止めたが、

「ぐっ・・・」

キキの掌底が腹に入る。こいつは剣技の中にこういった格闘術が入っているため、剣だけに気を取られると、拳や蹴りが襲ってくるのでやりにくい。が

「・・・っ！！」

僕は攻撃を耐え、ダガーでキキの腕を即座に斬りつける。ちなみに言っとくが僕たちは少々傷つけられても、訓練後は僕のヒールで治すので問題ない。このあいだ、訓練を決闘とシエスタに勘違いされて大騒ぎになった。

それからしばらく打ち合って、時間になったので傷を治し皆で食堂の入り口に行く。

「ん・・・？」

視線を感じてそちらを向くと、赤い生き物が見えた。また、あのサラマンダーか。ここ最近僕の事をずっとつけている。少々鬱陶しいが、危害を加えてくるでもないので放っておいている。ルイズたちと合流し午前の授業を共に受ける。僕としては外で身体を動かしていたほうが有意義なんだが、ルイズがうるさいので仕方ない。

昼食後はちとせの案で三人で厨房の手伝いをし、それが終われば、またキキと訓練をする。

「……シッ！」

「なんのっ！」

いつものように何合が打ち合っていたら、

「きゅい～」

上空からタバサを乗せた竜が降りてきて、

「任務」

「おう。すまんリオン、用事が出来たから今日はこれで」

そう言いい、竜に乗って行ってしまった。ふぅ、キキが出掛けてしまったから今日は地下の浴場には行けないか・・・。しょうがない、キキが戻ってくるまで裏庭にあるちとせが作った鍋風呂を使うか。

キュルケSide

「ん～～っと。今日もいい朝ねぇ」

私はいつも通りに朝を迎えた。

「さーてと、今日はどんな香水をつけようかしら」

私はベットから降り、髪を梳かしながら化粧道具を机から取り出す。

「ん？あらあの子、もう起きたの？朝弱かったはずなんだけど」

私はルイズの部屋の前に忍ばしておいたフレイムの目を通して様子を見てそう呟く。お化粧をしながら見ていると、部屋から愛しのダ

ーリンが出てくる。ダーリンとはもちろんリオンのこと。

「はぁ～。ホントにダーリンって、素敵な人。ルイズなんかにはもったいないわねぇ。フレイム～、いつもの様にお願いね」

私はフレイムに命じてダーリンの後を追わせる。うふふ・・・、彼いつも無愛想だけれどもそこがいいのよねぇ。学院の男子たちって積極的なのが良い所なんだけど・・・やっぱりダーリンみたいにクールなのがいいわよね。

「ん～？よし、今日も完璧」

私は鏡でお化粧の出来を確認して、化粧道具を仕舞い、タンスから服を出して着て準備完了。私が部屋を出ると

「おはよう、ルイズ。今日も早いのね」

「おはよう、キュルケ。別に私が早く起きたってあなたには関係ないじゃない」

「そんなこと無いわよ？愛しのダーリンとお話しできるじゃない」

「あんたまたぁ！？いい加減にしなさいよ！それに、リオンは私の使い魔なんだから手出さないでよ」

と、まぁいつも通りのやりとりをしていると、タバサがやってきたので私たちは食堂へ向かう。最近こうやって三人で食堂に行くことが多くなったけど・・・・ま、楽しいからいいか。それからのんびり朝食を取り、食べ切れなかった分はタバサに上げた。いつ見ても良い食べっぷりねぇ。

「・・・・・・・・・・・・・」

「Ｚｚｚｚｚｚｚｚ・・・・・・・・・」

午前の授業が始まり、私たちが教師の話を聞いてる間ダーリンは目を瞑り、ジッとしている。別に寝てるわけではないみたいだけど、はぁ～、カッコイイわ～。タバサの使い魔君、確かキキって言ってたわね。彼は普通に机に突っ伏して寝ている。彼もそれなりにカッコイイが・・・・・・タバサの使い魔だし、それにこれを気にタバサが恋でもしてくれればいいのだけれど、う～ん彼にその気はあるかしらねぇ。

それからお昼になり、私は本を読んでいるタバサの隣に行く。

「ねえタバサ、聞きたいことがあるんだけど」

私は本を読んでいるタバサに話しかける

「あの使い魔の彼とはどんな感じなの？」

「別に」

うーん、やっぱり素っ気ないわね。しかし、このタバサに恋の楽しさを教える絶好のチャンス。逃がしてなるものですか。

「別にじゃないわよ。あなたとても可愛いんだし、少しお化粧して笑えばあの使い魔の彼も、あなたの魅力にメロメロよ！」

「・・・・・興味ない」

!?微妙な間があったわね！ふふふ、これはこれは・・・・・。まさかの反応！やばっ、なんか興奮してきたわ。

「そんなこと言ってて言いの？彼結構カッコイイし、メイドの人たちに人気あるみたいよ。無愛想だけどよく働いてくれるって」

「・・・・・・・・彼の自由」

そこそこ反応らしいものはあるんだけどねぇ。今一歩たりないわね・・・、そうだ！

「タバサ、実はあたしねぇ、最近、ちょっと恋しちゃったのかもしれないの。聞いてくれる？」

私の話をすればもうちょっとは気にするようになる・・・・・はず？まぁいいわ。とりあえず私も色々話したいしね。だけど不思議ねぇ、なんでお喋りな私と無口なタバサとじゃ気なんて合うはずないのに、この子のそばにいると落ち着くのよねぇ。うーん？私はそんなことを思いながらタバサに話をしていたら、

「あ！そうか。そうなんだわ。無口なのに、そばにいて苦痛じゃない・・・・・・。そんな相手はあなただけよ。だから、あたしはあなたが必要なの。なぜって、そんなの唯一無二だからよ。やっとわかったわ。恋人の代わりはいくらでもいるけど、あなたの代わりはいないってことね」

うん。なんだか納得したわ。私がそういい終るとタバサがやっと顔を向けて

「・・・・・・必要？」

そう言ってきた。もう、そんなの・・・

「あったりまえじゃない！」

私はそう言いながらタバサに抱きついた。タバサはしばらく私の顔を見ていたけど、また本に顔を向けた。そんなふうにタバサとじゃれあっていたら、タバサの頭にフクロウが留まりタバサは無言のまま足に付いた書簡を取り、読むと表情が冷たくなってスッと立ち上がった。

「ん？なに？どうしたの？」

「出かける」

「はい？出かけるって、どこに？」

私は急に立ち上がったタバサに聞くが、あの子は何も答えずに行ってしまった。

「うーん。あの子たまにああやって授業サボって出かけるけど、いったいどこで何をしてるのかしら？」

ま、いいか。考えても仕方ないことだし。そういえば私何をタバサと話してたんだっけ？・・・・・ダメだわ、思い出せない。まぁでも思い出せないってことはたいした事じゃ無いでしょ。

「あ、そうだ。今日ダーリンをあたしの部屋に招待しましょ！うん、決めた。」

決めたら早速、もてなしの準備しなくちゃね。うふふふ、今夜が楽しみだわ。

日常編を書いてみたら、やっぱり変になった。（後書き）

どうでもいい補足情報

その1、タバサ、エルザ、シルフィードは鬼奇の詳細を知りました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1815w/

青いチビの使い魔

2011年11月30日23時55分発行